

蘆庵文庫蔵『院蔵人備亡』 解題と翻刻

大 山 加 大 藤
谷 中 藤 山 原
俊 延 弓 和 静
太 之 枝 哉 香

〔解題〕

京都女子大学所蔵蘆庵文庫『院蔵人備亡』は、後桜町上皇（一七四〇～一八一三）の仙洞御所で執り行われた各種儀式における院蔵人の役割を記録したものである。書誌は次の通りである。

〔整理書名〕『院蔵人備亡』〔著者〕細川常顕著・〔藤島宗順補記〕〔整理番号〕A三三三〔目録通番〕一二九八〔外題〕中央に打付書「院蔵人備亡」〔内題〕なし〔成立〕文化四年〔装訂・数量〕袋綴（紙縫綴）一冊〔寸法〕二七・五×一九・六㎝〔丁数〕全七〇丁〔料紙〕楮紙〔元奥書〕（貼紙・〔藤島宗順筆〕）「此一帖者去寛政三年以来／洞裏恒例臨時等院蔵人所役之分／源常顕筆記并所図也後來為覚／悟予亦乞之得書写題公用録畢／于時寛政六年夏六月中旬／木工助江俊常」

本書には、仙洞御所における諸行事の次第や、院蔵人たちの具体的な役割等が詳細に記されていることから、朝廷研

究において貴重な記録と言える。さらに、諸儀式の中には歌会に関する記録も含まれることから、和歌史の側面からも看過できない。天明の大火（一七八八）等によって宮中の諸儀式が途絶していたなか、寛政三年（一七九一）には歌会始が復活するなど復興の兆しが見られたが、本書にも「寛政三年二月十八日御会始」「寛政三年二月廿六日御当座始」「柿本神影供」など、仙洞御所で開催された歌会について、当日の動きまでも詳細に書き留められている。

さて、院藏人とは、院の御所に奉仕する藏人のことで、非藏人で上北面となる旧家から補せられ、幕末頃の員数は一人あるいは二人であった。近世後期には六十軒以上あった非藏人のうち、上北面となるのは十軒であり、そこから院藏人となる者はごく少数であった。なお、出自が異なるため、下北面から上北面へ上がれるというものではなかったという。さらに出世をする者は、六位藏人に補せられたが、ここまで昇進できる家柄は、諸大夫格では二軒の北小路家、非藏人では細川・藤島・橋本家の三軒など、極めて限られていた（下橋敬長著・羽倉敬尚注『幕末の宮廷』平凡社東洋文庫、一九七九年）。

奥書によれば、本書は細川常顕（一七五三―一八三二）の図入り記録を、北小路俊常（一七八一―一八五三）が寛政六年（一七九四）六月に書写したものとある。しかし、この奥書は貼紙に記されており、本文の筆跡とも異なる。また、本資料には寛政六年以降の年次が記された記事も多く含まれており、その追記はすべて本文と同筆である。このことは、俊常転写本を参照してはいるものの、本書が俊常による書写本そのものではないことを意味する。たとえば、巻頭の「元日四方拝」には、寛政五・九・十一・十二年・享和二年・文化四年の追記があるが、これらはすべて本文と同筆である。なお、文化四年（一八〇七）三月七日を下る記事はないことから、同日が本資料成立の下限と見てよからう。

ところで、本書には多数の貼紙が付されているが、その筆者は、筆跡から新日吉神社の祠官かつ地下官人であった藤島宗順（一七五六―一八二二）であると考えられる。また、貼紙に転写された奥書の筆跡も付箋と同筆であることから、

これもまた宗順筆であろう。宗順は明和三年（一七六六）三月十三日に十一歳で非蔵人に補せられ、享和三年（一八〇三）八月二十八日に四十八歳で正六位上・勘解由判官に叙任、その二日後に院蔵人に補せられている。宗順が院蔵人を辞したのは、文化六年（一八〇九）九月六日のことである。その院蔵人の補任時期と、宗順自身による付箋への書き入れの年次が重なることから、本資料は宗順が院蔵人であった際にまとめられたのであろう。また、本書には、同じく宗順筆の、剥がれた付箋四片が挟まれているが、それらは本文として書かれている記事とほぼ一致する。すなわち、当初宗順により付箋として追記されていたものが、本文として記されたわけで、宗順かあるいはその後の人の所為ということになる。と同時に、宗順筆の付箋・貼紙も多数残っており、本書の書写は宗順と同時代、もしくはその後それ程隔たらない時期の書写と言えるであろう。

従って、本文の書写者は不詳で、奥書も貼紙に記されたものではあるが、根幹となっている部分は、常顕・俊常が院蔵人の職にあった際に書かれた記録としてよいと思われる。常顕は安永四年（一七七五）十一月十八日に二十三歳で正六位上・大炊助に叙任され、院蔵人に補せられた後、享和三年（一八〇三）八月二十五日に蔵人に補せられた。俊常は寛政四年（一七九二）十月十九日に十二歳で正六位・木工助に叙任され、院蔵人に補せられた後、文化元年（一八〇四）十二月十一日に蔵人に補せられ、主税助に任ぜられた（『地下家伝』）。両名とも、六位蔵人まで昇進していることから、当時としては理想的な出世街道を歩んだ地下官人である。宗順は常顕と俊常の父俊幹（一七五一―一八二〇）と懇意にしており、なかでも常顕とは当時京都で活躍した歌人小沢蘆庵（一七二三―一八〇一）の門弟として、ともに和歌稽古に励むなど、とりわけ親しい間柄にあった。さらに、彼らは、書籍を共同で購入する非蔵人による講へも参加していた。そのような背景もあり、常顕と俊常による記録を宗順は参照することができたのであろう。地下官人達の円滑な文化的交流が、宮廷行事を下支えしていたと言えよう。

〔凡例〕

一、京都女子大学所蔵蘆庵文庫『院蔵人備亡』（整理番号A三三三、目録通番一二九八）の翻刻である。本書には院御所に於ける諸行事の際の見取り図が三十七図備わるが、それらの写真を翻刻の後に一括して掲げた。

一、図版中に書き込まれた語句や記事については、その翻刻を図版の左にまとめて示した。但、「ゝ」の記号については省略した。なお、図版中の人や器具、御座の位置と動線は朱筆で記されていることが多い。

一、翻字は原則として原本通りとする。但、以下の項目については改めたところがある。

一、旧字体・異体字・合字は原則として通行の字体に改めた。

一、適宜、句読点・並列点を施し清濁を分かった。

一、丁の表・裏の移り目は「」で示した。

一、合点は「へ」で示した。

一、割書部分は「」で括り、改行箇所には「」を示した。

一、虫損・抹消等による判読不能箇所は、字数が判る場合は□で、判らない場合は「」で示した。

一、単純な誤字訂正と認められる箇所は、改めた後の形で翻字した場合がある。

一、記事の検索の便のため、行事名に当る語句をゴチック体で示した。

一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

〔翻刻〕

【図版1、弘御所】（1才・1ウ）

【図版2、小御所】（2才・2ウ）

【図版3、常御所】（3才・3ウ）

【図版4、四方拝】（4才・4ウ）

元日、四方拝。子刻奉行別当藏人束帶。九年、亥刻可參被示。十二年、亥半刻可參、姉小路被示。

一、寢殿御装束如常。南面八ヶ所設灯械。土器油等從口向庁官江渡。

一、主典代・庁官・御隨身等廻庭上令奉仕、御拝御座。

一、四季御屏風四帖、主典代江渡。

一、廂御座灯台、五位判官代・予等設。予撤（灯台運送拵置。ヒタシ燈シン・間・土器廿枚等乞之。／灯台付油指ニ油乞。）

一、掌灯女孺供之、油杯從階下庁官授之。九年、御昼不見合廻ス。

一、御拝御座具之旨、主典代届、其旨申奉行。

一、出御之時御沓、藏人役送有之。無 出御者、臨期奉行より被示主典代江申渡。令撤 御座畢而各退出。

一、^{修理職奉行下知也}修理職如例可沙汰旨、兼日從院司下知之事。

一、相済後、御香炉、主典代より請取、伝奏衆間江入置。

一、修理職方職退出申渡。（5才）

一、灯械、庁官修理職より乞取掛之。

調進物如左

厚畳 薄畳 毯代 八脚机 香炉 木花 灯台 莚道 贖物

右主典代

庭燎黒木 油土器

右序官

五年、時儀如昨年。常顯参仕。

九年、所衆参勤。

十一年十二月廿八日、姉小路羽林より被示、所司江令下知。交名同日出。

十二年元日、予参仕如例。

享和二年十二月廿六日、被仰出奉行梅小路勘解由次官。元日、藏人已下亥刻参勤」(5ウ) 如例。調進物如例。富嶋召

遣於外様口申渡。当日木工助参勤。

文化四年正月元日、四方拜、亥半刻参仕。具集朝臣被示。

同年、掌灯女孀廻事、自今御昼被触後可申込評定被示旨、奉行具集朝臣被申伝。自余供候後、女孀廻之事斗残置。女孀

廻被供御灯。」(6オ)

【図版5、拝礼】(7オ・7ウ)

拝礼

先降車寄、於中門外仮立。申次正親町前大納言入車寄妻戸被進 御前。降西透渡殿沓脱出中門復命。終而於本所着沓立列。

関白殿令入中門給練歩。次々非練歩止位一揖。兩三步進。操裾（向右向左／流々有歟）。大臣公卿一列、藏人頭以下五位迄一列、六位一列、拜舞終而從下臈退出。藏人頭迄退入之後、関白殿御退入（練歩／如初）（但此間門院流之人ツ、居／他門之人警打）。大臣之間同上。次大納言、次中納言、參議、散三位退入。

一、寛政四年正月、敷設如常。

一、申次執權勸修寺前大納言経逸卿。

一、奉行勸修寺右頭弁、当日辰刻可參被示。藏人兩人束帶。主典代・庁官參仕事。警固事、同朝臣被示。取次江申渡。」（8才）

一、巳刻、家拝礼ニ不立人參仕。当年午刻過、家拝終而各參仕於便所御祝出。未刻過下殿。中門外、仮立如例。申次執權勸修寺前大納言、進殿下下承事由、如凶進承事申被示殿下其道下中門沓脱徒踐於車寄辺被着沓如例。殿下入中門橘之南より練歩。令止楷陰辺給。次大臣不及練歩。次ニ止沓掛操裾。次々如此。六位藏人迄參進之後、一度ニ拜舞。終而從下臈退出。參議退終而殿下より御退出終。練歩次々退出。

一、同九年、申沙汰柳原頭弁均光朝臣拝礼巳刻候間、辰刻藏人兩人可參被示。

一、主典代・庁官・所衆（所衆当年／始而參）等參勤之事。禁中ニ而藏人方之官人極臈より催之事候間、此方ニ而も藏人より可下知道理候間、召設候而可申渡旨被示。幸主典代詰合候故、井上丹後守江申渡、余者令申伝。

右之子細も申渡置候事。」（8ウ）

一、其外諸事、当日頭弁參勤以前可設置被示候事。

一、中門開事并中門唐門等警固、如先例可覺悟旨取次小佐治右衛門尉江申渡。

一、殿庭掃除之事、兼日下北面江申渡。

一、掛戸事、修理職江申渡。

一、入夜之灯台灯械等如例。庭燎如図四ヶ所可設事、是又被示。但、如常御台所ニ而用意之事、取次江申渡置候事。」（9才）

【図版 6、吉書御覧】（10才・10ウ）

吉書 御覧

一、寛政四年正月三日辰刻参仕^{束帶}。先公卿着座。次別当着殿上奥座。藏人着横敷。別当気色、藏人受之拔足出簀子。庁官持参吉書、藏人取之附別当復座。別当附御厩別当或執権。内覧畢。奏聞御覧畢。返給。又、公卿内覧畢。復座。別当披見畢。目藏人々進寄取吉書下庁官退入。

一、入御之後、参役一統、^{御厩別当}徳大寺大納言実祖卿・^{別当}裏辻中将公理朝臣・藏人木工助大江俊周恐悦申上。一統御祝出。

一、寢殿以下御装束如常。

一、^丑執権中門廊より参仕也。〈但、刻限参便宜所。臨期被／昇中門車寄妻戸〉

一、^子乱箱此方より出。其余如昨年。中門開并警固。」（11才）

一、正月三日補設取掛。従別当承官人廻之儀、從此方評定卿江申届。官人江命廻候儀、下北面ヨリ以非藏人評定卿江相届候事。

一、九年、常顯時義如例。刻限卯半刻。

一、十二年十二月廿八日、梅小路殿被示所司江令下知交名出、則奉行江附。

- 一、享和二年十二月廿六日、被仰出奉行庭田中将、藏人頭卯半刻参勤之事、富嶋江申渡。当日予参勤。
- 一、文化四年正月二日、御門開警固之事、更ニ不及下知。式面ニ而如例覚悟之事、取次渡辺信濃守尋ニ付如此答畢。
- 一、御門開警固立之事、敷試具之比取次江申渡。撤却之比又申渡。」(11ウ)

【図版7、御齒固】(12才)

御齒固

- 一、亥正月・子正月等如图。二日申半刻 出御。朝餉女房沙汰也。御装束藏人奉仕。
- 一、寛政九年元日、拝礼之後更可出御旨、評定卿兼而被示。時義如例。
- 一、丑年元日、設置退出。翌日撤却。
- 一、来巳正月元日、被 仰出候旨、極月廿八日、豊岡殿被申渡。
- 一、十年元日設、三日撤。
- 一、文化四年正朔、表使内々尋合今日之由。依之構置退出。自評定衆更ニ無沙汰。御塞申出。当番唐橋殿点檢、兵部大輔被從之。宣旨也。翌日参勤之上、令撤却。如此ニ而相濟也。已後覚悟之事。」(13才)

【図版8、千秋万歳】

【図版9、同(貼紙)】(14才)

千秋万歳

寛政四年正月五日

一、明六日、千秋万歳催如何可沙汰旨、評定卿被示。取次江万歳役人警固階番以下如何可沙汰旨申渡。御装束、殿奉行沙汰也。刻限凡已刻。

一、当日糺具否評定卿申 出御以前豫万歳以下廻切戸外。且可令敷設旨申渡。其後言上。

一、出御之刻、評定卿被示。悉廻御庭。但附武家共。

右当年 出御之後、漸具。明年可心得、取次江も申渡。

一、出御二而小兒出座見合如何進可始旨修理職江令下知、復座南簀子。

終而 入御之時、庭上之人数早々令退而退入。其後退出申渡。

一、同五年、時義如昨年。但、御塞以前南切戸之外迄悉廻シ置。取次忝人東透渡殿之沓脱之辺ニ置。出御之後、右之取

次江令下知、廻小御所御庭。入御以前悉令退事如初。」(15才)

一、享和二戌年、出御前警固立附武家以下鳥飼迄着座之後言上。出御之時万歳而已出座。」(15ウ)

【図版 10、白馬御覧】

【図版 11、白馬御覧（挟み紙）】(16才) (16ウ)

白馬 御覧

一、寛政四年正月、奉行裏辻羽林依与奪催常顯参仕衣体如常。

前日御隨身拝借物有願。裏辻羽林江申入相済、勝手ニ可申出村雲江申渡。

白丁四人如例出候様同願。則取次江申渡。

一、主典代・庁官辰半刻参仕事。丹後守申渡。庁官令申渡。

一、家公依御欲楽申次差次侍中参仕。

一、敷設具之旨評定卿江可届事。

一、当日御隨身揃評定卿江可届事。

一、警固、評定卿より兼日有下知。

一、五年より所衆加。

(補入) 一、殿上小庭々燎之儀、依官人申出候。右ニ付別当梅小路殿江申入候处、先今年者殿上公卿間等江灯台」(17才)

出候様被命、丹後守江申渡之。」(17ウ)

一、文化三年正月七日申半刻斗、灯台四基金器四枚皆具庁官江相渡。庭燎可廻取次へ申渡。

八日・十四日等御修法御撫物被出候ニ付、是迄蔵人壹人参勤候处、自今 禁中之通御塞見繕之節、当番之人、蟬クロ、ハヅシ置候趣、評定六条殿江申入置候事。

子正月

一、来八日・十四日御修法御撫物辛櫃之事。同昇人之事。

一、中門開警固之事 刻限已刻無遅々。

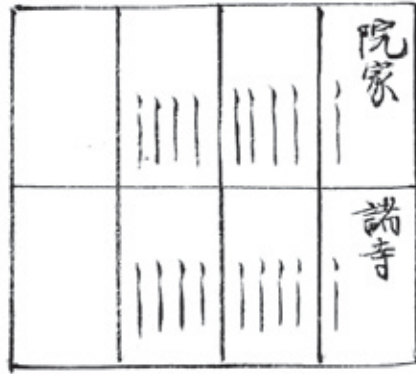
一、庁官参仕之事。

寅正月

右烏丸弁殿被申渡。取次江申渡候事へ此儀如何、不審。例年中門廊之車寄之唐戸、命下北面令／開之。臨期例年 御撫物返上之節、極臈参上之上下北面／令開之流例也へ(八日・十四日／等同断)。

酉年正月六日、同断。日野西弁殿被示出雲守へ申渡之事。

享和元年十二月十三日、辛酉ニ付御修法被行。御撫物被出節、辛櫃并昇人等廻候事及遅刻候ニ付、取次心得相尋候処、此方より催促之時相廻シ候覚悟ニ而候故、是迄及遅刻候故、自今庁官より申之、早速相廻シ候様、自今覚悟之事、渡辺出雲守へ申渡。庁官」(18才) 江も申渡。返上之節も庁官先此 御所へ参候而、為持候而、上御所江参候様同申渡置候事。」(18ウ)



【図、院家・諸寺】

一、当日参仕之上、内侍中江交名申請ニ遣杉原四折、如左。

今日諸礼参勤交名

申請度候也。

正月十三日

111	111
111	111
111	111
111	111

右色紙文匣三人、四人名札差込仕丁使。

右到来之上、院伝間ニ而武伝より来書付と令校合、其上書認也。

正月十三日諸礼已刻出仕。

一、院家諸寺八幡社務医師等献上之交名令清書。右案紙六位侍中江乞請、院伝江入見参清書。

一、献上之交名、院家一紙、諸寺一紙、八幡社務一紙、医師一紙、中奉書ニ認。同紙上包（一緒ニ／包）元大奉書也。
一、同断。次奉書交名上包同紙。」（19才）

右伝奏江附

右料紙

中奉書元大奉書 一帖 筆 一対 墨 一挺

従御内儀乞

次奉書元上々奉書 一帖 杉原元次奉書 一帖 美濃紙元大御定 一帖 筆二対物、元老対物 二対 墨 一挺

従口向乞之

一、院家揃伝奏江届有。出会竹間南北対座。入口北、両度同上。

田中善法寺・法国寺、東西対座。入口東。但老入宛別ニ言渡也。

諸寺諸大夫間、東方東面列座。伝奏竹間より被申渡。間ノ襖開置。

医師、先御詰廊下ニ而拝診之事、第一老入江被申渡。無 御対面之旨被申渡儀、諸寺同様。」（19ウ）

非藏人揃奉行衆江申入。御詰廊下江上北面藏人之内、番頭・番頭代一人宛 中宮御所第一等令誘引。奉行衆被申渡後、

御礼被 仰出候。御礼両役奉行衆御内儀等江申、退出誘引同上。」（20才）

【図版12、三毬打】（21才）

御吉書・三毬打

一、役送上北面・藏人、各老入兼日有沙汰交名出。当日申半刻参仕。狩衣・指貫。評定奉行之内江申。

一、宿直下北面二人、三毬打役人相揃之上、評定江届。

一、刻限命取次、悉廻庭上。役送兩人如図参着。

一、小兒出座之時、上北面参進于北第一間。御吉書從簾下被出（從内被上）。取之於東階授下北面（昇階三級／取之）。硯蓋共授。下北面取之、入三毬打之内、上北面復座有躰踞。次藏人参進于南方燭下、取蠟燭於東階授下北面同上。点火返上藏人如元而復座。次午飼発声其余応之。畢而三毬打之竹、下北面持参于本所乘硯蓋。上北面取之於本所返上畢而復座。次 入御各退入。

一、御前御燭二基（清火也。從清間／乞之）南西北御燭一基宛出。

一、諸役人不残廻之後、御塞言上之事。」（22才）

一、廊下之奥戸已年メ切之事。
一、御道筋廊下六ヶ間垂簾屏風余メ切。」（22ウ）

【図版13、寛政三年二月十八日御会始】（23才）（23ウ）

御会始

一、藏人兩人申刻参仕之事。兼日北面非藏人奉行被示交名姓名。当日参仕狩衣指貫。届御会奉行。

一、灯台三台豫設之（打敷〔三枚〕金器〔六枚〕／替共）。

一、出御之刻、御文台、御会奉行被渡。如図居置（奉行御懷紙／持参之刻也）。

御製披講之前、有搔上。御前五位院司、御文台元切灯台、藏人設之（土器一枚搔上持参／受灯下而搔上也）畢而御懷紙奉行被持退、藏人取御文台退。

一、相済後、於便所献出巡流三献。先居肴物羽盛次銚子〔間土器一枚持／一献肴二献加〕次加 毎々所改土器。殿上人不及加。但被附哉否、從献方尋置。

一、寛政八年未半刻可参。藤谷殿被示。

寛政九年
一、木工助雖服中依輕服役送勤仕、重服者可憚、但物語者雖重服参仕〔併／不／預御会之事〕。(24才)

【図版 14、関東使参院】(25才)

【図版 15、同、竹間】(25ウ)

関東使参院

一、兼日被示刻限参仕、狩衣指貫。

一、献上物参院以前持参、如图設置。藏人伝奏江尋操置。

(補入) 一、進覧献上之品等、北面受取、相揃之上、手目六取寄引合相揃之旨、伝奏江申。例之通可操旨、被示。夫々如图操已前、伝奏入覧之事無之。三家献物者、伝奏間江操也。從差図鈴ノ口ニ操置。」

一、各着座之後、院伝目藏人、々々受之、取太刀・目六授。披露伝奏〔左目六／右太刀〕復座。伝奏披露畢而東使御礼、伝奏復座。有数時、幾度も如是。畢而東使所司代等自分御礼。

一、院司申次太刀目六自分披露、置中段端、退于廂御礼申。

一、東使被下物数多時、上北面藏人三人参院、以前被下物、伝奏被渡。

一、御返答之後拝領之事、東使被申渡。役送江目有之、受之。如图持参。

一、関東使参院之節、自今寢殿御格子上斗上候様、評定衆被申渡。但下格子妻戸等其儘候事。」(26才)

【図版16、寛政三年二月廿六日御当座始】（27才）（27ウ）

御当座始

一、役送上北面・藏人、各各人可参。奉行被示刻限参仕狩衣指貫、届御会奉行。

一、刻限大臣・親王以下次第着座。

先御陪膳人進供御題復座。次大臣・親王之料、四位・雲客役送畢。被居置中央。次公卿以下進被取之。次御硯・料紙等、御陪膳之人被供進。次四位・五位・雲客・大臣・親王之料役送。次上北面藏人賦公卿・雲客硯。次料紙從第一人被送下被置座末、藏人取之、退兩方取重。次各退入（下臈／為先）。

一、上北面御左方、藏人御右方也。御左方硯不足者、藏人更進賦之。

一、進時從親王才前膝行。

一、大臣・親王無出座之時、上北面藏人料紙有役送。羽口ヲ右トス。

一、読上入夜、藏人御燭御用有之。搔上如御会始。

一、寅正月紙役送常顯、羽口作者之右之方ニ相成様ニ前ニ置退。」（28才）

（28丁の袋の内側に折紙一紙が挟み込まれている。紙背は書状）

〔御髪上之事〕

一、自評定日時被申渡。

一、庁官参勤之事取次へ申渡、或召寄於外様口申渡。

一、修理職申渡事。

一、当日從御内義文匣蓋へ入被分、手燭添、從評定被渡、請取置。

一、庁官廻之事命。

一、修理職階間廻之事命。退出之例之通令申。

一、渡廊ニ而庁官へ渡。先勘文相渡、文匣之蓋・手燭相渡。

一、相済之後手燭・文匣蓋・勘文袋等返上、於初所請取外様口へ廻。

一、階間通之事申。

一、評定へ相済旨申届、返上之品々属之、退出之事届申候。」

退出之事被申、庁官退出之事外様口ニ而申渡。

(以下、折紙への書き入れ)

一、御取置之事、朝取掛之事評定へ申届。取掛候旨申入伺□意候者其義也。右二台分。

一、殿上薄疊厚疊改之事。庁官調進日限之事伺、評定へ附尋定庁官へ命。当日参仕之事無之。宅へ伺出之時参仕之口外様口へ可出旨申置。其比迄評定へ尋定申渡事。

一、弘御所御取置之日、長幕者下北面渡斗也。夫を拵前ニ用之事。手取之所取掛申評定へ届之事、出来届之事。

一、弘御所翠簾掛改木舞押中央鎮子置之事、十二月末へ為構置事評定へ届両方へ申渡事。

(以下、折紙の紙背の松尾相美書状)

逐日寒氣相募申候。愈御清康珍重奉賀候。然者来七日、乍御苦勞弥御参之儀希入候。寒氣之時分一入御苦勞恐入候。

仍為念以書中如斯御座候。尚期貴面可申述候。早々頓首。／十二月三日
〔宛名〕〔勘ヶ由判官殿 相美／不及御答〕

【図版17、闘鶏】（29オ）（29ウ）

闘鶏

- 一、闘鶏從祇候殿上人献上（兼日修理職勘定、当日辰刻、人数催之事申渡、当日廻之事命。撤格子・掃除等北面沙汰也）。
- 一、催判官代差次藏人俊幹敷設、判官代・藏人等申合可奉仕旨評定被申渡。
- 一、牛飼藤木・仙納吉田弥一等 禁中相濟後參。衣体、水干・高木沓^{ツラツ}。鶏持參之人、小舍人童・雜色等也。
- 一、刻限中門開、宿直・警固附武家廻事、評定有下知。
- 一、鶏并牛飼揃催之、從判官代言上。

- 一、御裝束北面奉仕（御裝束具之節、殿上唐戸クロ、ハツシ置事。／御裝束具之事評定江申、職人為退出撤却、申半刻と申渡）。
- 一、寛政七年 禁中依無闘鶏、童子扶持・衣体拝借、極麁江相願、評定衆取次江被命 禁中より御借用。
- 一、享和元年三月三日、闘鶏 禁中不被為有。依之 洞中斗也。仙納弥一差用物 禁中ニ而御拝借申沙汰判官代ヨリ評定衆へ差用之儀被申入。其後以番頭取次江有下知。」（30オ）取次ヨリ禁中江申遣事。」（30ウ）

【図版18、寛政三年御楽始】（31オ）

御楽始

- 一、三月卅日御楽始、午半刻 出御于小御所。未半刻過 入御。御人数左大臣殿以下公卿十一人・殿上人三人・楽人廿人。

一条

役送祥光朝臣・延光・北小路上北面肥後守重久・藏人源常顯・大江俊周、各衣冠單、公卿座母屋設疊、殿上人東廂、樂人打

板、弦管共役送有之。大臣・親王・四位五位殿上人。公卿者上北面、藏人・殿上人者不及役送其樂五郢曲殘樂等有之。

畢而役送撒樂器、次於便所獻有之。饗頭・昆布・蛸、大臣・親王於休息所出、公卿・殿上人於竹間出、藏人役。

一、兼日為役送上北面二人藏人二人可參被示衣冠單。

一、前刻限有彈。畢而樂器被渡、附名札置十五帖敷。

一、樂人迄出座之上賦出。」(32才)

御樂

【圖19、御樂】(33才)

癸丑年九月廿二日、於小御所有御樂、役送上北面藏人參仕之事。狩衣指貫着用之事。前日從奉行被示刻限午刻、無遲々可參旨也。

一、御人數、関白殿・西園寺前内大臣殿・公卿十一人・殿上人八人・樂人壹人。

樂五曲殘樂郢曲等有之、役送大臣者、四位萩原右兵衛佐殿・五位數大夫殿、公卿、上北面松尾宮内權少輔・藏人常顯・北小路木工助等也。但弦管共役之殿上人者不及役送。管者隨身、弦者兼而設有之、樂人迄悉出座之上賦樂器。

一、未半刻被始、酉刻前終。

一、公卿之樂器彈之後被渡、十五帖敷へ操置、相濟後十五帖敷ニ着置、其儘退例也。

一、寛政八八廿七、頭中将樂器雖殿上人公卿之通、役送有之。」(34才)

【図版20、寛政三年二月一日、上北面藏人・非藏人御礼図。同五日、御幸始 還幸後、供奉上北面藏人同上】
 (35才) (35ウ)

【図版21、三月十八日柿本神影供】(36才)

神影供 三月十八日

一 丑年三月十八日巳半刻、神影供役送常顯参仕狩衣指貫。申刻過 出御于小御所。御装束如图、御人数一品宮以下十九人。御文台役送如御会始。

一、御人数神酒并御祝酒有之、献方沙汰也。

一、寅年神酒上北面酌也。辰年評定衆被渡、予酌。

一、寛政九年神酒俊常酌也。」(37才)

更衣之事

寛政三年三月卅日

明日昼御座更衣ニ付卯半刻藏人壹人可参旨、院司裏辻中将殿被示。帷伝奏衆間有之旨是又被示。掛替候儀者、内々勘定取計、終而伝奏衆間江入置、前後評定衆へ届、院司江者序ニ届候事。

一、子四月一日・十月一日、更衣自今庁官・所衆奉仕候間、当日可下知旨、裏辻羽林被示。

一、御帳帷四幅四帖 同 五幅四帖 同御几帳 三帖

右於伝奏衆間被相渡、明日此方共取出設替候而直ニ伝奏へ附候様被示并右設替之儀、自今三月下旬九月下旬ニ院司江相

尋候様、依時義伝奏へ可相尋被申渡、且諸司江も此方共迄伺出候様申渡置候事。

一、子四月一日、庁官以下相揃之上、評定衆へ相届、廻于寢殿、其道中門廊ヨリ昇、南廂西妻戸ヨリ入。」(38才)

一、御帳帷・御几帳等、東布障子之下ニ而相渡。相済後於本所受取、直ニ申渡出切之儀如初。

一、御帳帷・御几帳等、伝奏衆江附退出。

一、九月廿八日、来月一日更衣之事如例可覚悟哉之旨伝奏へ伺候処、如例可覚悟旨、六条殿被示。且御几帳帷等被渡へ御物置ニ有之間、勝手可出旨也。廿九日、西四辻殿へ嶋以肥州申入。

一、来月一日辰刻、所衆・聴官等可参越後守申渡。当日令掛替時義如例。四月一日届者、加勢錦小路殿江申入。

一、丑四月二日、裏辻殿被申渡、是迄更衣之節伝奏へ伺候得共、自今評定衆へ可伺旨、木工助へ依幼少宮内権少輔／扶持被申渡事。

一、同十月一日、裏辻殿兼日被示、当日辰刻参仕、庁官所衆へ命令奉仕候。帷評定衆より申出終而返上、同上。

一、八年九月廿六日、伺令下知畢。

一、十二年三月廿六日伺候処、十年十月一日之通、日蝕以前可被取替、藤谷殿被示。卯刻迄」(38ウ) 参集候様、大石

江申渡候事。当日木工助参仕候事。

一、四月十日更衣之事、前月下旬可為如例哉、評定卿江伺、可為如例答有之。庁官・所衆奉仕刻限申渡。所衆口向詰合之時者令直達、無之時者取次江命申遣。文化二九廿九、当番評定藤谷為敦卿へ伺可為如例被答。

一、文化三九廿七、当番押小路実富卿へ来月一日更衣可為如例哉伺、如例可覚悟旨、被答。所衆大石越後守詰合令達。庁官江も可伝命。」(39才)

祓読誦之事

正五九月

前一兩日為誘引、上北面藏人之内壺人、已刻参仕之事并警固可催、評定被示。

一、当日刻限参仕狩衣指貫。刻限吉田殿参仕、從御内儀御初穂白銀壹枚出、唯今被参旨ニ而被渡。先令開中門、催警固、告吉田殿、次氏人先廻御庭敷設御本社前庭。其後吉田殿被廻〈降車寄／入中門〉催之人從而廻。供御初穂〈令廻沓／并円座〉。次祓読誦終而撤御初穂。次末社参拜有之。終而告評定、令閉中門、令退警固、退出。

一、柿本参社相尋、樓間之鑑用意之事。

寛政八年五月四日、吉田殿依服中祝勤仕参勤届評定衆へ可届事。

一、候所相尋御台所候得者、廻候事取次ヲ以可申遣事。

一、廻候節中門開警固廻候事、尤誘引如例。】(40才)

一、御祓弘御所階下ニ而受取評定衆へ可附事。

一、退出可申渡事。

一、天明四七年之例。

一、柿本遙拝歟。但参詣候得者鍵為持廻候事。且評定衆へ否可申事。】(40ウ)

【図版22、嘉祥】(41才) (41ウ)

嘉祥

一、刻限 出御于小御所、伝奏評定衆祓候、公卿殿上人召于 御前、有包菓子之儀、畢退入。

一、更召于 御前公卿〈中段折廻／北上西面〉雲客〈南廂東／上北面〉上北面藏人〈南簀子櫓以西／東上北面〉各出座。

一、巡流次第一献、先上北面（第一／之人）取銚子（御銚子有便所從南廂進中段。但銚子右土器間／一枚最初置上、後左手ニ受之）。從第一公卿巡流一献、公卿畢。銚子之人出南廂（下段西柱之下／闔之外）向巽方、御盃置前（公卿／授之）（雲客／置下）。壹人宛進出、畢而上北面藏人同巡流（雲客同所第壹之人巡流／之時、第二之人替杓）。下臈持御盃退、上北面持銚子退（直小／掛）。

一、小掛次第（二献自第二到第一、從第四到第三、下皆倣之。／但雲客者不掛。公卿・上北面藏人者不掛于雲客、先居肴物（下臈之藏人取之第一／第二之間置之。無蹲踞）。次、上北面第一之人取銚子（土器／如初）候第二之公卿前取杓、藏人取提候加（藏人之上首役／之少退加之時）（望見進寄。肴者／公卿互ニ賜之）次、藏人取肴物運下（第二第一畢而、第四第三之間置之。公卿末座ニ而／一人之時置其上方）。公卿畢而復座（加肴／之人）。杓之人出南廂（一如巡流肴末座／公卿賜之無加）。最末之人、持御盃退。上北面持銚子退。次、藏人撤肴物復座、自下臈退入小掛之時發声。」（42才）

【図版23、六月祓台盤所 寅年評定衆依差図如此】（43才）

【図版24、同、常御殿下段】

【図版25、同、文化三年台盤所御構（貼紙）】（43ウ）

【図版26、同、享和二年依風雨如朱書】（44才）

六月祓

台盤所御掃除之節、蟬クロ、放置。已刻斗庁官茅輪調進之旨、取次より相届。評定同依示廻御庭中門腋也。透渡殿南簀子東ヨリニ而女房江附。

一、亥刻過 出御于台盤所。

一、上北面藏人壹人宛為役送、申刻可參、奉行被示（加賀守／常顯）、參狩衣指貫。
 一、公卿已下、常御殿西廂^ニ而有之。茅輪設有之。公卿・殿上人南方東、上北面・上北面藏人西簀子、役送上北面如図進。公卿・雲客一人宛進、相濟而退。藏人進取輪。上北面進相濟而、藏人退。上北面又進取輪。藏人進而詠。終而從下臈退出。

一、輪爪当年不及役送、殿上人相濟而被送。終而小間使江返ス。

一、御掃除之節、蟬クロ、ハヅシ、上御格子上候事、且自今御構と評定衆へ可届事。

一、丑年、大藏權大輔常顯參仕。爪評定衆被渡、大藏權大輔役送。

一、子文化元六月卅日、庁官父子共所勞^ニ付、主典代井上丹波守代役參勤也。」（45才）

一、台盤所翠簾、是迄見繕之儀雖無之、自今至而見苦敷候者、可有見繕、評定樋口殿被示。」（45ウ）

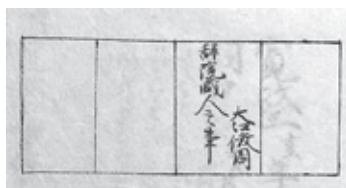
【図版27、寛政六年八月廿二日清祓御装束図】（46才）（46ウ）

清祓

一、辰刻參仕狩衣。院司公理朝臣依命御殿御装束整畢。刻限清祓被修。大麻卜二位被授。公理朝臣取之、自台盤所簾下授、女房被上御前後返給。如元卜二位返給（此間俊常竹間江出／遣戸之辺候）。」（47才）

【図版28、御法会結日參役一統藏人迄御対面之図。但御書院 御封面也】（48才）

【図版29、夏御法集】（49才）



【図版30、寛政四年八月廿四日東本願寺始参院】（49ウ）
 二月三日、依有御心願、御鎮守御本社千反楽有之。催四辻中納言殿、御初穂白銀一枚被出。楽人廿人狩衣、平調五常楽千反合歡塩長慶子時義如例。自立楽誘引、羽倉筑後守・子狩衣指貫。相濟後、兩人恐悅申上。

例月一日於

御鎮守立楽催之事、上北面藏人之内、兩人已刻參勤狩衣指貫、楽人十人警固揃候事、取次相届催之人申。言上之後、御初穂白銀一枚（乗雲脚／台）金百疋宛二台、御内義出被初旨評定衆被示。取次江令下知。催兩人共一緒三廻、白銀供御本社江畢。可初令下知立楽五曲拝殿前。

但、正五九月同於末社、二曲御初穂北一東一供進也。畢而御初穂評定衆へ返進。」（50才）

寛政十二年五月一日

一、触穢後、立楽被奏事如例。誘引之事、警固之事、評定衆有下知。

一、楽所之事、無沙汰候故、伝奏衆へ尋試候処、四辻家へ伝奏衆より通達有之由被答畢。」（50ウ）

【図、大江俊周 辞院藏人之事】

享和三年

七月八日、北小路木工助病氣危篤ニ付、此書付之通、院司勧修寺頭弁殿江附候処、即刻被及言上

聞召之旨被申渡。親族石見迄申伝。依故右馬助例、御礼不申上（危篤ノ之例也）。右従同列差出。其後死去届も両頭年預月番奉行等江四折ニ書付差出候事。」（51才）

(貼紙)

〔文化二年九月十二日辰半刻、兩人之内可有参侍、兼日梅小路定肖朝臣被示。宗順参侍、弘御所就有御修覆、檢分相廻。依之暫時台盤所御椅子可移于殿上、朝餉御座可為拵押小路実茂被示。上北面語合、御椅子運候也。暫時而如元設之。〕

(貼紙)

〔文化元年十二月四日、岩倉具集朝臣当番、宗順当番面会、此間殿上辺御修覆皆出来、如尋常設有之間、為心得被示旨也。〕

(貼紙)

〔文化元年十月三日、梅小路定肖朝臣被示。自明後五日、殿上公卿間屋根修覆取掛^二付、殿上公卿間等可被移于他所候得共、無其所候故、尋常之儘^二被設置候。併屋上之職方之者登候事故、内々殿上之具、弘御所北廂へ被納置候間、官人之内談合、一兩輩明日未半刻比可相廻、藏人老人可参合旨、尤官人上下体^三而随從之者語合、相伴可廻旨也。井上丹波守へ申渡。翌四日具集朝臣当番、定肖朝臣被参予当番参合、井上丹波守・大石越後守預り召連相廻、殿上之具納于北廂、薄帖卷片寄置、公卿間厚帖北方へ寄重ね置。〕(51ウ)

【図版31、寛政三亥年十一月廿八日、鷹司左府公・二条右府公御拝賀、依小除目洞中之儀及戌刻、仍灯台・灯械・庭燎設如是】(52才)(52ウ)

【図版32、鷹司政熙公関白宣下】(53才)

寛政七年十一月十六日、政熙公関白 宣下

寢殿御簾見繕掛替。南面・西面・透渡殿等灯械、公卿間殿上等灯台設之。中門外・車寄北等庭燎設之。申次公理朝臣、

申次如常。御拝舞之後、被告召之由、閑白殿令進 御前給、御拝畢而令退出給。」(53ウ)

【図版33、徳大寺内大臣実祖公拝賀】(54オ)

寛政十年七月十九日、徳大寺内大臣実祖公拝賀、申次藏人頭柳原頭弁均光朝臣参侍、被示予曰、陽明家御門流之人、申次進退、自今今日之通候間、右之通木工助江も可相伝被示。仍見及之処如図。

一、今日雖及秉燭、被用白昼義、不用燭。」(54ウ)

【図版34、同拝賀、雨之儀】(55オ)(55ウ)

【図版35、寛政六年三月七日立后之節 此御所被用本宮】

寛政六年三月七日立后之節 此御所被用本宮間、四日ヨリ十日迄被移如図。」(56オ)

【図版36、享和二年四月六日東庇江被移】

享和二年四月六日東庇江被移。右ニ付庭田中將重能朝臣・予参仕、官人不及参仕。御台所沙汰也。」(57オ)

【図版37、同、東庇】(57ウ)

一、亥八月廿日、一条輝良公閑白殿 宣下御拝賀ニ付寢殿殿上等敷設有之。兼而裏辻羽林依与奪、木工助参仕、寢殿・南面・西面・公卿間等撤御格子、唐戸悉開、殿上敷設主典代庁官奉仕、開中門立警固、開車寄妻戸、申刻斗令参給、申次裏辻公理朝臣、御拝舞終而自中門外御退出、撤却終退出、前後評定江届。

一、朝餉見繕之事 兼日主典代庁官参仕之事。下北面撤御格子御掃除事、修理職掛戸事等令下知。中門開警固事、從評

定下知也。併色々有之故、不落様締置事。

廿二日、同御方直衣始敷設同上、從車寄妻戸令人公卿間給。其後從便路、内々之方へ御参、有御対面。從本路御退出。撤却終退出。

從裏辻羽林与奪。一、主典代庁官不及参。

九月十六日、二条中納言中将殿参拝、申次公理朝臣、御装束同上。

廿四日、直衣始午刻同断、主典代庁官不被催。」(58才)

廿七日、鷹司内大臣殿隨身兵杖ヲ給、同断、西四辻殿与奪、予参仕。

廿八日、同御方直衣始同断、木工助参仕。

十一月廿八日、鷹司左大臣殿・二条右大臣殿、参拝同断。

十二月二日、同御方直衣始同断。

同四日、久我内大臣殿参拝同断。

同六日、同直衣始。

寛政三

一、於小御所御講釈之節、聴聞之公卿雲客へ可告事有之時、上北面藏人之内、從十五帖敷徑南廂進、可告末座雲客旨、評定堀川左京大夫殿肥後守へ被示。

十二月十五日、二条右大臣殿執事已後、被奏吉書。院司広橋弁胤定敷設、先々如拝賀時、藏人木工助参仕。」(58ウ)
出御朝餉御座、如常。

同十六日、勸修寺按察使執權已後、被奏吉書。院司広橋弁、藏人予参仕、敷設如昨日。

四年壬三月六日、二条右大臣殿隨身兵仗拝賀、殿上敷設〈庁官主典代／出仕之事〉中門開警固之事。
中門廊車寄戸開事、兼日頭弁殿被示也。

七日、同直衣始。同日、六条中納言殿拝賀。

同日敷設之事、可為如拝賀旨、兼日右頭弁殿被示也。

一、藏人 主典代 庁官 所衆 上北面 下北面 御隨身 召次

右之通四折ニ認、勸修寺頭弁殿被相認次第、書帳面之次第、自今如是被改候間、為心得、何も申伝候様、被示候事。

子六月八日

一、七月十六日大風ニ而寝殿御格子吹上候ニ付、蟬ク口、カケサセ候処、損失多ニ付、同三十日別当西四辻殿江申入之處、

院司之内何れより申入候而も不苦候間、下官より直ニ評定、西洞院殿へ申入、即刻修理職奉行へ被申渡、樋口殿被点検之處、

九ヶ所紛失有之候事。

一、薨卒死称呼之事 一、減半飯之事 一、俗人出家仮服之事」(59オ)

一、無服瘍仮之事

右四ヶ条、自来可守令条被 仰出候事。

子七月八日右西四辻殿以書付被示。尤主典代以下召次迄令伝達畢。

一、自今建春門代之外置路、陽明門代置石等、可有之被 仰出候事。

置路之上、尋常之人々、猥往来不可有之事。

右子九月九日、奉行押小路殿、院司裏辻殿より以書付被^{申渡}、主典代以下令伝達。

寛政四年七月

一、来十七日、堀川左京大夫殿、宰相之拝賀、主典代、庁官、所衆〈所衆今度／初而也。自今如此〉、三人共衣鉢衣冠可着用、西四辻殿被示、丹後守へ申渡。

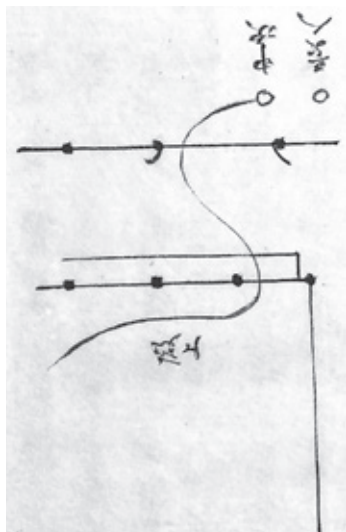
一、右二付、寢殿・公卿間・殿上等、御装束御掃除等有之。人数可奉仕旨、同被示、申伝献料之事、近来内々願二而、慶人より被下。大臣二百疋、納言百疋。始者主典代兩人分配之处、近来庁官へも分候事。」(59ウ)

八月廿六日、近衛三位中将殿御拝賀也。時義如例〈申次日野西殿、從車寄妻戸昇降／查所衆、高屋主計丞束帶也〉。

九月一日、直衣始也。

一、今度申次、從車寄昇降目立候処故、查取候人、束帶可着。尤殿上之辺ニ候候人、主典代庁官所衆等、何ニ而も可取事故、申合可取旨、院別当裏辻殿被示、富嶋左近将監へ申渡、今度所衆取候事。

一、同日、竹屋殿附拝賀也。被立殿上口申次家公也。查者所衆同人。



【図、慶人・申次・殿上】（60才）

十月十五日、九条殿御元服後、御参拝也。申次勸修寺頭弁、杏庁官也。敷設如例、酉刻過也。仍灯台掌灯等設、主典以下悉奉仕。

十一月十三日、広橋頭弁殿・院別当柳原弁殿、年預等拝賀也。柳原殿被立殿上口北面家公申次。同十五日、姉小路中納言殿拝賀敷設、主典代江令下知置。

去十三日、敷設之事家公へ柳原家より申来、主典代江御下知也。

六年二月十一日

来十六日、二条殿・近衛殿拝賀。十九日、直衣始敷設之事、裏辻羽林被申渡。

一、三月一日、御入内三付裏辻——女院御所江御告使、殿上敷設、中門辰刻開事、同朝臣被示令下知畢。」（60ウ）

一、拝賀之節、中門開之儀、四位五位六位院司より下知有之間、其覚悟候様、伝奏六条中納言殿、梅小路前宰相殿、橋本

本所所司授笏、揖慶人受答揖而退出、慶人拜舞畢而退出（從便所／御礼）（有之）。退出後、閉中門、令撤御裝束退出。

同八四廿四、^{已刻}二条治孝公左大臣轉任御拝賀、申次日野弁殿、前日広橋頭弁胤定朝臣寢殿以下敷設、中門之如例可下知旨

被示、主典代丹後守取次修理職江令下知。來廿六日午刻、二条殿直衣始、中門開并車寄妻戸、同殿上公卿間敷（62ウ）設之事、同朝臣被示、主典代取次修理職へ申渡。若及入夜候者、灯之事同被示候事。

一、依夏不設垂布先例并上考。

九月廿六日、藤谷殿拝賀、入夜退出。唐門開事。

十二月八日、鷹司為丸君童殿上有別記。

十六日、同御元服同

廿二日、一条忠良公右大臣拝賀、三条内府公拜被免。

梅小路勘解由次官殿、先駈ニ而申次被勤。仍敷設之事、兼而予へ被示。

右大臣殿令立中門給、申次、直進承事由、着台盤所妻戸、被奏事由（其道、昇中門之車寄妻戸、／笏懷中）、復命之時、降中門沓脱徒踐徑本路退出召具執沓。

已四月十四日、來廿日已刻九条殿中納言御拝賀ニ付殿上敷設之事、并中門開、并警固事、葉室殿被命主典代江申渡、中門

警固之事、取次同人、当番故申渡。（63才）

一、廿四日、直衣始同上。

寛政十一年三月十一日

一、來十六日、近衛内大臣殿御拝賀、廿二日直衣始ニ付辰半刻殿上敷設、并中門開之事、日野西弁殿被示。仍大石越後守詰合故申渡、主典代已下江伝達。中門之事、取次虫鹿へ申渡。掛戸事、修理職造酒江申渡。

十六日、酉刻前令參給、庭燎已下用意之事、伝奏衆より取次へ用意雖被申付、不用。時義如例、日野西殿先駈ニ而申次故直ニ退出也。

一、御装束之儀、前後其別ニ評定衆江從此方共届ハ不申、平日之通故也。違平日候節者届事。

廿二日、近衛殿直衣始、所司狩衣例之由、富嶋申候事。

九月廿四日、鷹司中納言中将殿拝賀、予廿六日直衣始木。

享和元年三月十一日、一条殿重昇殿之日、梅小路勘ヶ由次官殿別當也從殿上退出之節、沓豫設有之候。全体退出、見請候而置沓候而被付候時、沓鼻可持筈ニ候。禁中ニ而（63ウ）小舍人取候節も其通ニ候間、自今其通ニ可覺悟候。尤誰

ニ而も殿上昇降之節如右覺悟候事候。若又違背歟、後日相違候ハ、可被相糺候間、所存承候而可申入旨、梅小路殿被示。主典代井上丹後守江申渡候處、尤其通之覺悟候得共、先日者間違之儀有之、ウロタヘ候而不行届候由、申述候故、左候ハ、右之通之儀、自今無之様、所司一統可申合旨申渡、梅小路殿江返答申入畢。

三年四月十六日、勸修寺大納言還任拝賀、申次万里小路弁殿敷設以下如例、主典代庁官所衆參仕所衆束帶、前々日取次、信濃守江所司參仕并中門之事有下知。

同十七日、辰刻直衣始、万里小路殿予へ被示、丹後守へ申渡。（64才）

（貼紙）

〔文化四年二月廿七日、正親町別當実光卿拝賀、依院司雖拜被免推參、申次橋本侍從実久豫鋪設之事被示、木工助官人令沙汰、当日宗順當番參侍。同日交野左馬頭時雍判官代拝賀、申次極脇參侍、官人相揃之上鋪設之事評定衆へ被届、宗順同断届一統ニ宗順申入、鋪設取掛之事命官人。交野拝賀相済、申次相済退出之旨、極脇・評定衆へ被届退出、実光卿

申半過參侍、及秉燭退出候ハヽ、掌灯之事可令存知、命官人候様、橋本拾遺被示、其旨主典代井上丹波守・庁官嶋田内匠頭等に申示、雖然不及此義退出也。(若及秉燭／時者灯台／四基可相渡也。灯械油等口向より／相廻由也。)

同年三月七日、鷹司左大将殿拝賀也。申次梅小路勘解由次官定肖朝臣。兼日官人參勤之事、上北面出雲守を以被下知由、当日藏人詰合被尋、宗順当番之由申、左候ハヽ、幸別不及參詰合候ハヽ可然被心得。八日直衣始、已刻鋪設候。官人相揃候ハヽ令下知、慶人被退出候ハヽ、鋪設可撤却令下知置可退出、相濟迄不及見合旨被示置、当日宗順參侍、官人相揃鋪設之事評定衆へ届相廻、定肖朝臣被參候上、此旨申退出。」(65ウ)

三月十六日、院別当裏辻中將・西四辻左兵衛佐、以書付被申渡如左。

非常之節、御帳台以下運送ニ付、主典代井上丹後守・庁官嶋田主計頭・同内匠權助、召次木本右衛門尉・山田兵部大録・大石越後守、以上六人參勤。

右之人数、非常之節、參勤之儀、院司江可相届。若未參勤以前候得者、藏人江届候間、時儀見計、片付之事可下知旨被示、尤右人数江者両朝臣申渡被置候。此方共無人之節、上北面語合候事、右之人部未定候間、治定之上書付可被渡事。

一、挑灯用意之儀、口向ヨリ書付差出候間、藏人も入用之書付可差出事。

同月廿日、此間被申渡候運送之節、御文庫江被納候哉相尋候処、御立退之先江運送之事、尤右守護者地下斗、藏人者前後差闘斗、尤院司も被点検候事。

右、是迄八丁四方出火之節者參勤、其余及大火候ハヽ、見合參勤候。其通ニ而宜哉之処、後日可為右之通被示。右非常不限出火候事。」(65オ)

一、同廿四日、藏人兩人共、非常供奉ニ加候様、両朝臣被申渡候事。

一、地下官人、非常之節參勤之儀、院司參勤無之節者、伝奏衆へ申入、御用無之趣申渡、令退出。併院司參勤暫者見合候事。

卅日、非常參勤、地下主典代富嶋左近將監・所衆小佐治右衛門尉・高屋修理亮・大石越後守等相加召次被相除候事、裏辻羽林被申渡候事。

一、御帳台以下品数

御帳台 一式 夏冬御帷子 獅子狛 土敷 二帖 中敷 一帖 上筵 一帖 御几帳 三基

昼御座

縹緗御帖 二帖 御茵 一枚 錢形御屏風 三双

夜御殿」(65ウ)

縹緗御帖 二帖 御茵 一枚 灯籠 一

台盤所

御倚子 縹緗御帖 二帖 御茵 一枚 高松御衝立 一基 日給簡 一枚 台盤 一脚

殿上

日給簡 一枚 文杖 一枝 台盤 三脚 厚帖 二帖 薄帖 三枚

一、獅子狛箱之事并灯燈合印之事、大石伺候故、裏辻殿申入、右後日獅子狛不及箱、御倚子ニ乗候様被示、灯燈合印者、一方墨、一方朱ニ而御紋付候様被示、則申渡候事。(66才)

寛政八年五月三日、中門廊車寄之妻戸、蝶つがひ・金物損有之、修理職奉行外山殿江申入候処、此方より直ニ可申付被示、山田兵部江申付候事。

来月六日、於寢殿御法会道場被講試ニ付、御帳台并昼御座等撤却之事、院司正親町前大納言殿・日野西弁殿被示。尤更衣之節之准抛ニ而庁官所衆可催事、且又内々大工畳師等ニ而も可催哉。何も禁中様子聞合、便宜次第可取計被示。仍所衆之内、大石越後守、当時勘定頭殿令内談之处、不案内之者、取掛候而も無益候故、最初被仰付候節取掛候職人、指物師故、其職人畳師等、勘定頭より可相催旨申候故、其段申入之处、如何様ニも無子細之旨、被示候事。

右同御殿、北廂東ノ方、屏風仕切候内江入置事。

寛政十一三十一日

一、去七日、寢殿板敷御修理ニ付、御帳台、同所北ノ方江被寄、修理職奉行沙汰也。仍為「(67ウ)心得、院司梅小路勘ケ由次官殿、木工助へ被示。八日予被伝畢。

一、殿上、厚帖・薄帖敷改之事、庁官より取次江申出候故、院司裏辻中将殿江申入候処、来廿二日敷改之事被示。則虫鹿三河守江申渡候事。

右、是迄修理職奉行衆掛候処、自今院司掛ニ相成候旨、裏辻公理朝臣被示畢。

寛政八辰年十二月十九日

一、常御殿、御屋根葺替之間、小御所ニ渡御有之。依之、近日弘御所ヲ小御所代ニ被用候事有之。御帳台、暫被撤、夜御殿江被納置。廂御座并朝餉御座、台盤所之御椅子、台盤等同被納置。尤院司之掛ニ而内々之計也。依之梅小路勘ケ由

次官殿、予、所衆大石父子参仕。職人勘定頭大石之催、御帳并御几帳帷等ハ、評定衆へ申入、箱へ一緒ニ入御物置江納置候事。享和元辛酉十月十一日

享和二年十二月廿四日、殿上、厚帖・薄帖敷改之事、庁官より評定衆江伺候処、例年藏人より被聞候事故、藏人請合無之候ハ、里亭江行向可伺被答候ニ付、木工（68才）助亭江伺出候故、可伺置被答、且自今例年里亭江可伺出候間、宜計呉候様、相頼候事。

享和三年、朝餉間、板敷御修覆有之間、東廂南方、朝餉代被設。院司梅小路。

同 如元。

同月三月、御帳并御几帳鼠喰、御修覆。院司梅小路勘ケ由次官殿、評定衆へ被申立。十一日、去三日御装束之節、南面之簾せまく候故、柱之際ニ而透候。御沙汰有之候得共、評定衆ニ而御点檢有之様、梅小路殿被申込旨被示。

一、勘定方ニ而致方無之哉之旨尋候処、少シ広過候而も不苦候ハ、如何様ニも相成候旨答候事平岡也。

寛政十年（68ウ）

先達、梅小路勘ケ由次官殿、院司拝賀之節、小森差次藏人申次被勤ニ付、沓傘等之儀ニ付、所司違背之儀有之、院司より伝奏衆へ被申込、段々締有之。寛政十年八月六日、院司姉小路少将殿より木工助俊常江被示如左。

自今、殿上小庭并中門内等召具不被入御場所故、院司四位五位六位院藏人等之沓傘、官人取候事、其外者、自分召具為取候様、可覚悟旨被申渡。尤右之趣、関白殿政熙公へも被申込伺等之上、院司柳原頭弁殿より、所司一統江者被申渡趣也。若自今以後違背之儀於有之者、御答可被 仰付旨也。猶又頭弁殿より以書付可有巡覽旨也。後日勘ケ由次官殿江も御尋申入処如是（右更巡覽者無之旨、梅小路被示／併押小路被示分之旨也）。

十月廿五日

一、先年小森——、院司拝賀之節、予申次官人雖取査、自以前直シ有之、笏も簀子ニ置。相済候後、召具沓受取ニ遣候処、其沓脱ニ有之。取帰リ候様、官人申「(69才) 候故、受取帰リ候故、広橋頭弁殿申込候得共、無程昇進ニ而等閑ニ相成有之事、勘ケ由次官殿申入候処、全体官人心得違ニ申者、殿上之小庭ニ召具入候事者、官人共より制シ可申処、却而官人より入レ候事不相済。自今右体之不正之儀有之候ハ、可申入旨被示候事。

一、八月、同御帳台中之御几帳、鼠喰有之趣、下北面御掃除之場所故、見及候趣、木工助へ告候故、押小路——阿波権介殿江申入。則評定衆へ被申込、御修覆被 仰付。後日御修覆出来。評定衆より院司江被渡、如元設置。

一、同月、同殿上并公卿問簀子御修覆ニ付、台盤厚帖・薄帖等被撤、四位・五位・院司・藏人等参仕。命所司、寢殿北廂江令入置。

一、九月廿六日、右御修覆出来ニ付、如元被設。院司梅小路——、木工助参仕、所司設之、如先日。但此日 御幸供奉相兼。自今右体之儀、別人参、相兼間敷事。

一、申次進退、何レ之門流ニ從候哉之事、伝奏江被届置候間、可申入旨、梅小路被示事。」(69ウ)

午十月廿五日

一、右申次之節、陽明家門流之通、予木工助共相勤候旨、梅小路勘ケ由次官殿江申入。極月廿日比也。後記仍日不慥。

未正月六日、主典代井上丹後守江面会之序有之。昨年柳原頭弁殿より拝賀申次之人、沓傘等之事被申渡候義可有之如何、承知之事哉相尋候処、沈酔ニ而難相分。翌七日朝来于清所口乞面会。昨日申候義、吟味候処、昨年四月柳原頭弁殿より被申渡趣者、四五位・六位・院司・藏人等申次之節、殿上小庭不被入、召具御場所候間、自今沓傘執候様被申渡。富嶋御請申上候上者、相違無之旨申。依之、先年小森拝賀之節、予申次ニ而不都合之義有之。晴之御場所故、差掛リ

難洪候間、差別有之事哉尋糺候段申聞候處、右被仰渡候上者、違背有之間敷、猶又心得違等無之様、所衆庁官江も可申談答候事。」(70才)

享和元年五月二日、所司代牧野備前守、御庭拝見被仰付、午刻參于武家候所、次廻御庭拝見、附武家以下誘引、終院伝奏衆誘引、于竹間有賜物。勅製薰物囊薄様居柳筥、役送藏人予伝奏衆へ手伝。先是目録、伝奏衆・所司代江被授拝見之後、有目予受之持參、備前守頂戴之後、非藏人江授、非藏人取次へ渡、羽二重三疋、藏人木工助持出居座上、頂戴之後、下北面引之。畢而從本路退出。

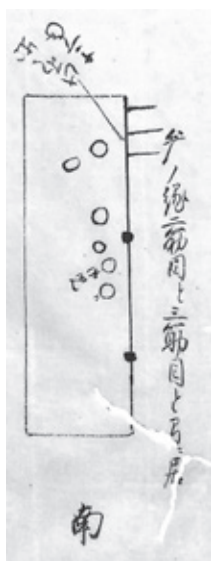
上北面御使之節。

青侍 兩人 輿者 三人 下部 兩人 挾箱持 壹人 宰領 壹人

右勘定江申付。

輿 壹挺 長柄傘 壹本 笠籠 壹荷 挾箱

右取次江申付候事。」(70ウ)



【図、簷ノ縁二筋目と三筋目と間二居・此所へ出、十二年・御見・南】

寛政八年九月廿七日御囃子之節、御能奉行唐橋殿・平松殿両卿より差図如此。良久朝臣・常顯参仕。指貫不及其義。」(71才)

(奥書・貼紙)

〔此一帖者、去寛政三年以来、

洞裏恒例臨時等院藏人所役之分、源常顯筆記并所図也。後來為覺悟予亦乞之得書写、題公用録畢。

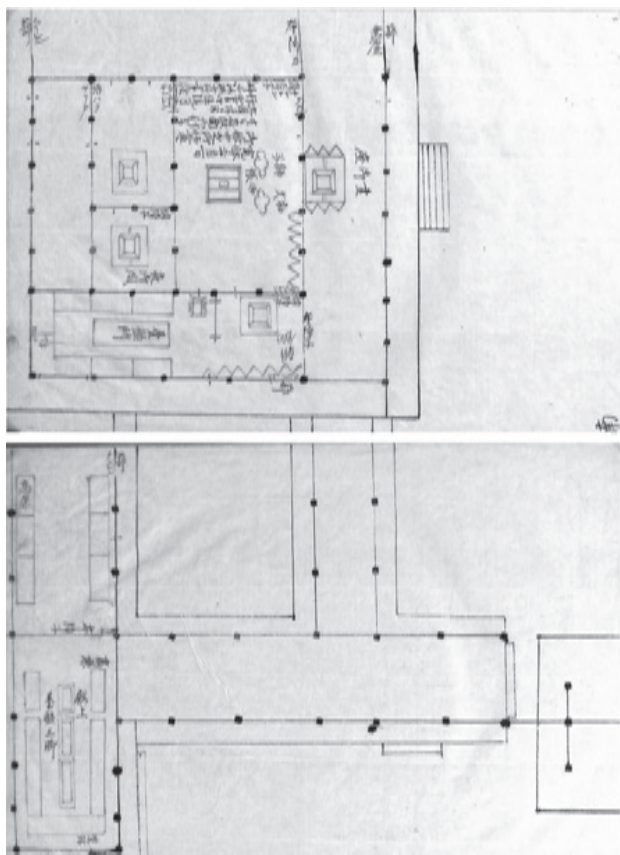
于時寛政六年夏六月中旬

木工助江俊常

四方拝

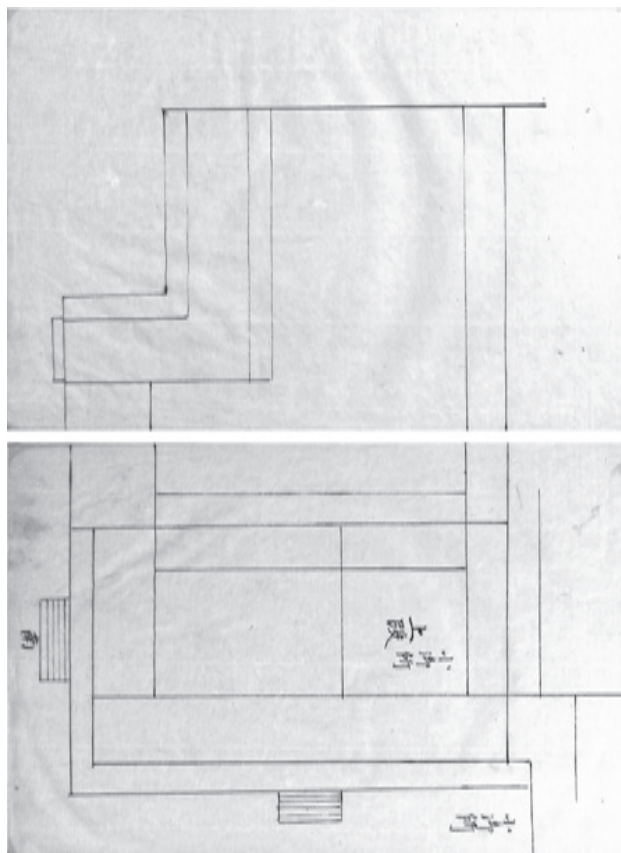
一、廂御座灯——之所、灯台運送拵置。ヒタシ灯シン・間・土器廿枚乞之。灯台付油指油乞之。」(71ウ)

部・紫端・高麗・布障子・殿上・台盤三脚・部・ケンレン・高麗」(一オ)
 (右上から) 部・スイレシ・布障子・朝餉・絹障子・ケンレン・台盤所・札 (中央) 昼御座・狛犬・獅子・御帳・夜御殿・絹障子・ケンレン・絹障子・ケンレン・部 (御帳の絹ハリ・ヤリ戸・部・垂簾・布障子・スイレシ・部 (御帳の左) 寛政十二月一日、御帳中之御帖三疊共被敷改。南北行旨、九月卅日被 仰出旨、四位院司姉小路・梅小路被申渡。」(一ウ)



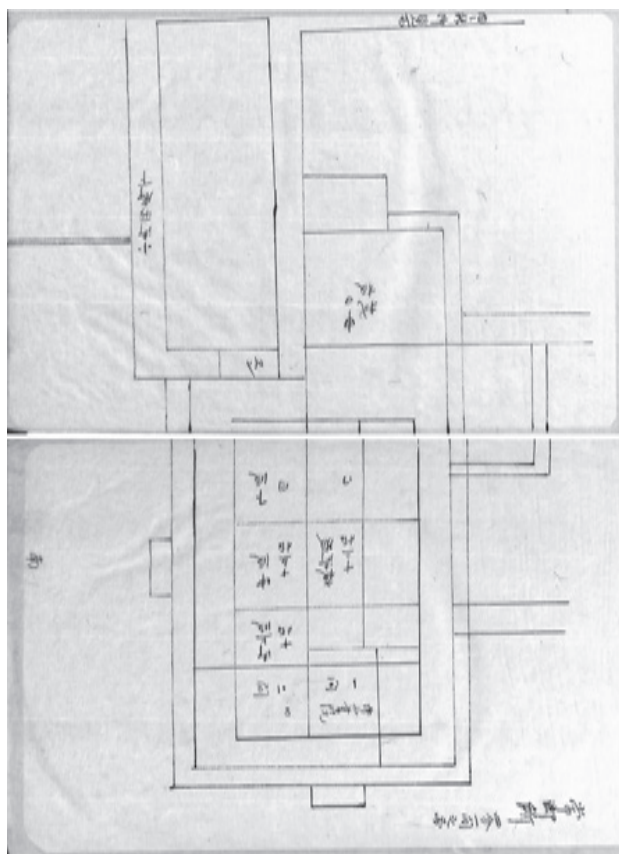
【図版 1・弘御所】

小御所／上段・南」(2才)



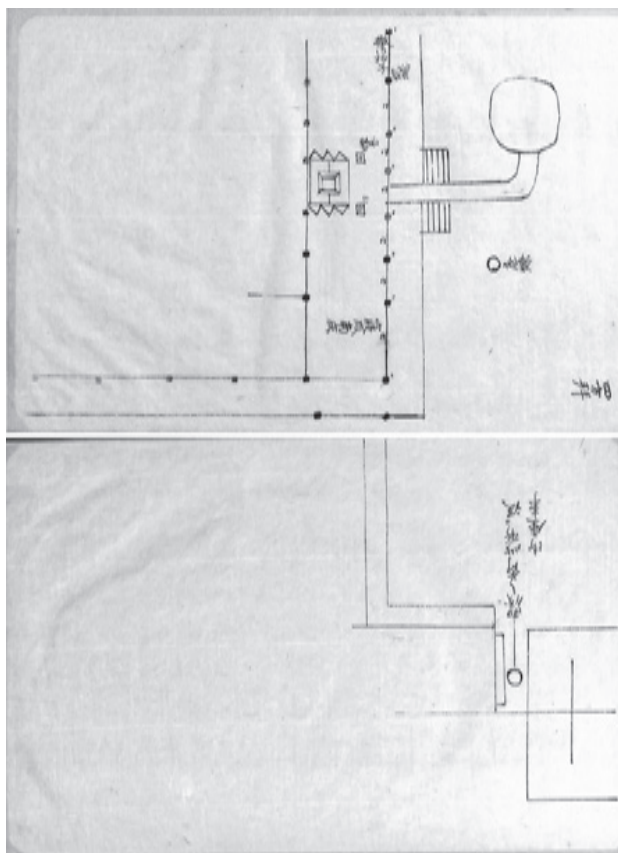
【図版2・小御所】

御小書院／一間・同／二間・御上段／十帖・中段／十五帖・
 下段／同・夜御殿／十二帖・同・南」(3才)
 申口／拭板・エシ・小御所廊下・内々能御覽所」(3ウ)



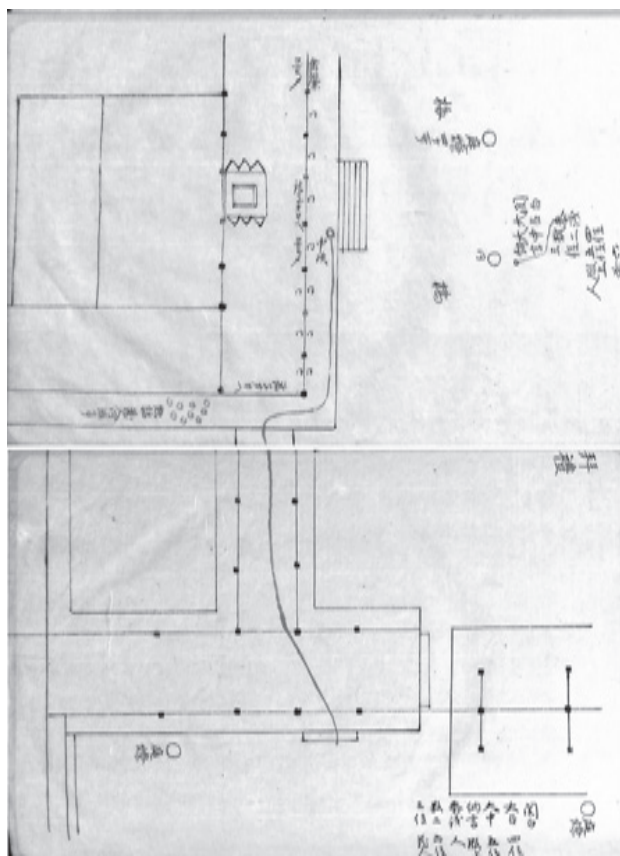
【図版 3・常御所 四分一間之図】

雨儀之節、此所ニ設御座事。」(4才)
 庭燎・寢殿南庇・灯台・同・灯械・撤御格子」(4才)



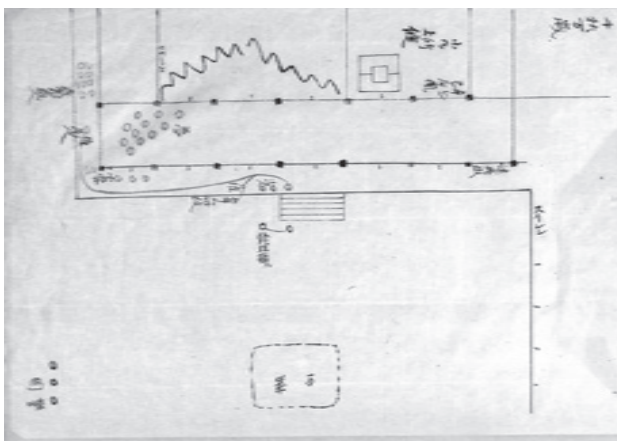
【図版4・四方拝】

庭燎、閼白・大臣・大中納言・參議・散三位・四位五位殿上人・六位藏人・庭燎二（七オ）
 閼白・大臣・大中納言・參議・散三位・四位五位殿上人・
 六位藏人・梅・橘・庭燎四ヶ所・同・惣詰・藏人同詰事・鎮
 子オサへ・申次・垂簾・コマヒメ・鎮子オサへ・コマヒメ」
 （七ウ）



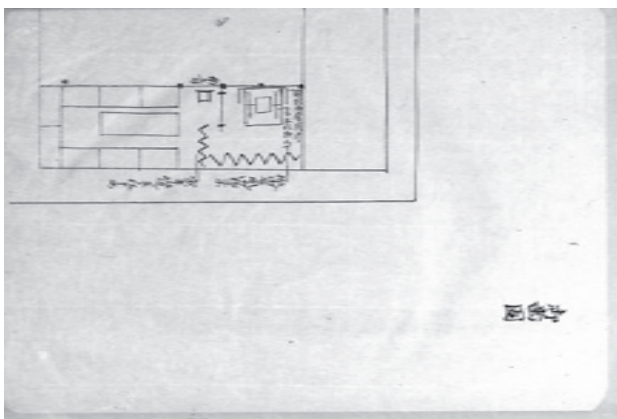
【図版 5・拝礼】

万歳・警固・修理職・スイレシ・建具撤・小兒・催・五年如
 此改・雲客・公卿・催・藏人・上北面非藏人・スイレシ・コ
 シ屏風・小御所上段・スイレシ(14オ)



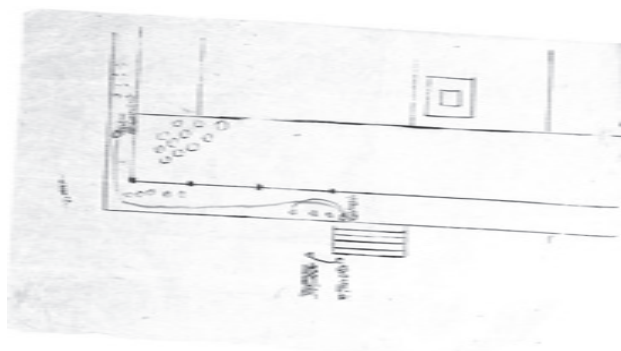
【図版 8・千秋万歳】

撤御屏風御格子等・寅年此辺三立候様申出・銭形御屏風片・
 クチ木形御几丁・南立付(12オ)



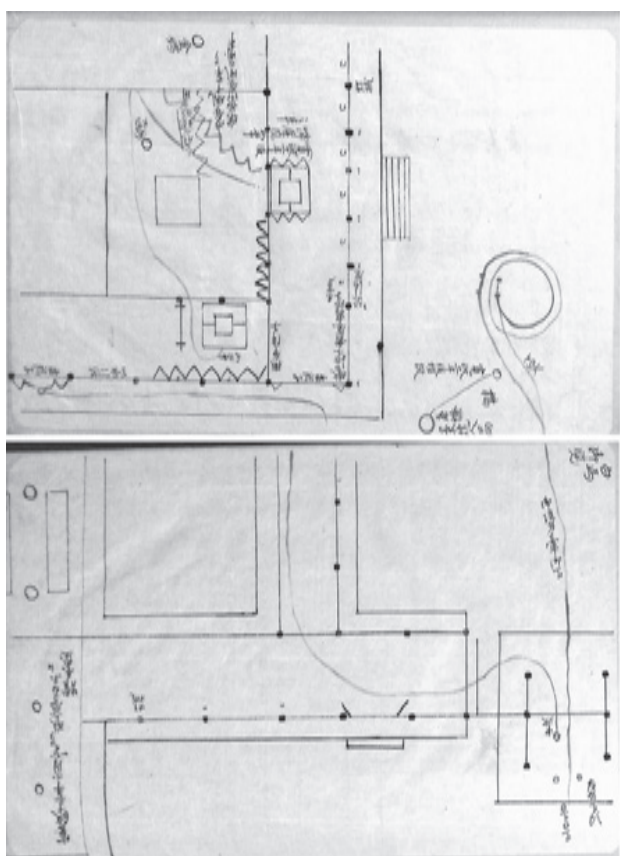
【図版 7・御蘭固】

修理職・此所へ進出・此所へ進出（朱筆）・此所之評定卿請目
（朱筆）「（14才）」



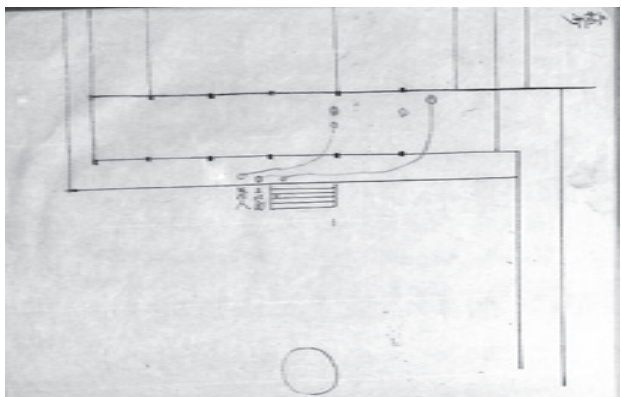
【図版9・千秋万歳（貼紙）】

左右馬頭・馬・馬・御隨身牽御馬・申次・灯械・寛政十三年
 正月七日ヨリ殿上公卿間等江灯台出（16才）
 可廻入・橘・庭燎・黒木焼入口向・寛政十一年後移設・置鎮
 子・同・同・以水引括・置鎮子・撤御格子垂簾置鎮子・木々
 ヒメ・以水引括簾・燈械・撤布障子・如常・金燭・庇之錢形
 ヲ用・此屏風十二年ヨリ茶器御屏風可用事・寛政十一年ノ後此
 御屏風如常之事・金燭（16才）



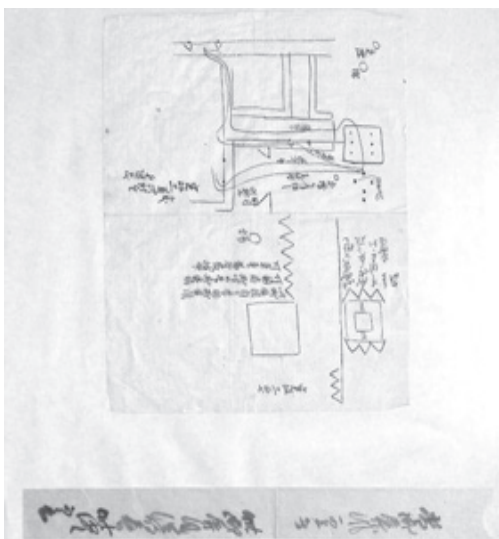
【図10・白馬御覽】

上北面・蔵人」(21才)



【図版12・三毬打】

①常御屏風可立所・此御屏風徒明春此儘可立。
座如常御屏風可立置。藤谷殿被命。燭・此御屏風ヲ撤シ、御
帳ノ東ニ一双共用來候処、重而 出御後如此。(左)寛政
十一小森差次頼望、進退如此・左右馬頭・庭燎今年設之・所
司候此所・下殿道・退入之道・昇殿道・復命・橘・庭燎

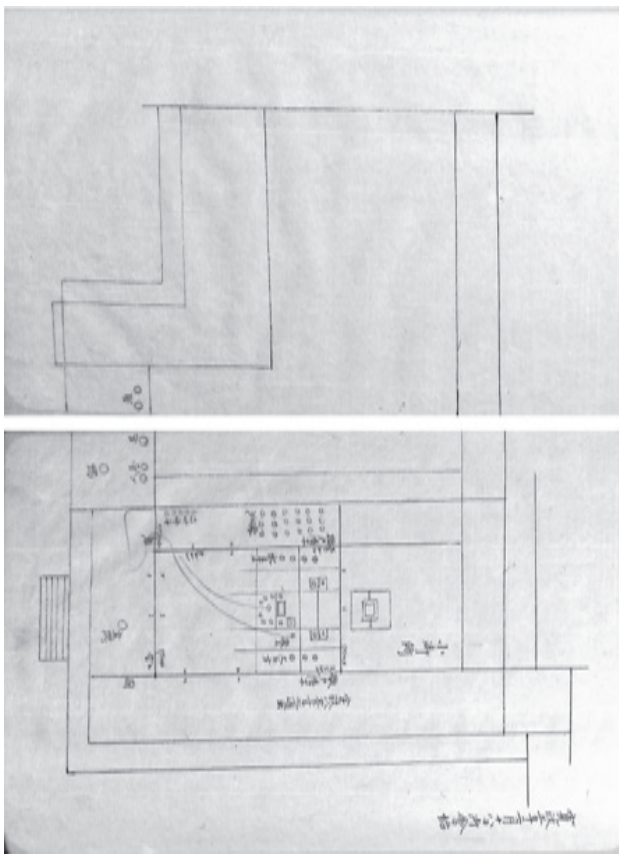


【図版11・白馬御覽】

雜」(23ウ)

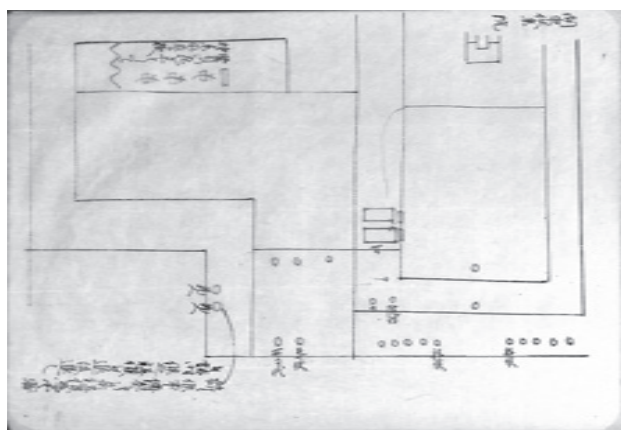
燭・藏人・具・燭」(23オ)

子・聴聞衆・御会奉行・メ切・撤・スイレシ・ケンシ・金
シ・大臣方・擧上・親王方・スイレシ・ケンシ・撤戸障
小御所・寛政八墨書之通出・撤戸障子・閑・スイレシ・ス



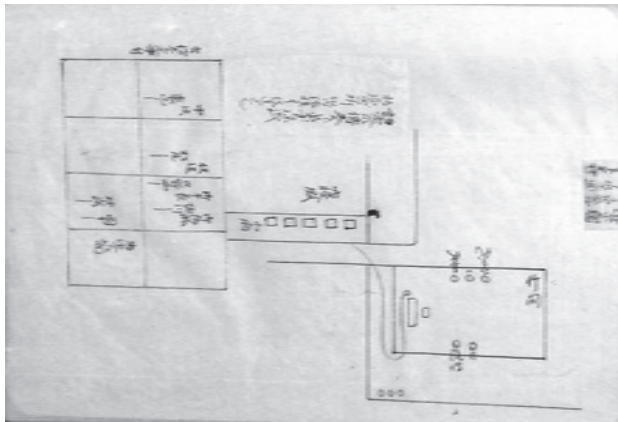
【図版13・寛政三年二月十八日御会始】

祇候・祇候・院伝・同・東使・所司代・此所二候事伝奏」被
 示。祇候公卿雲客／被詰時候之。祇候被退後退也・藏人・藏
 人・豎目六左を上として／持参取直画授」(25才)



【図版14・関東使参院】

(付箋①アリ) ↓

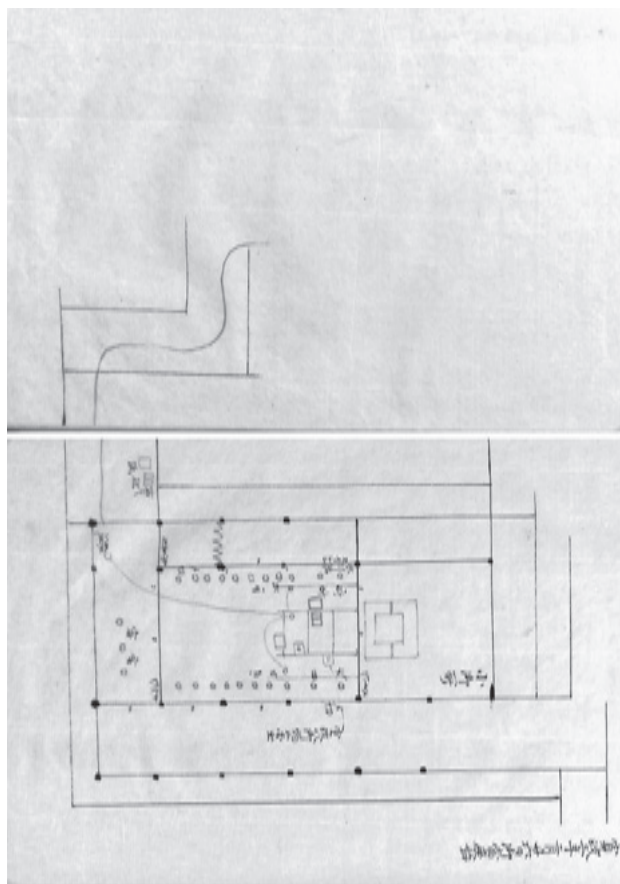


【図版15・関東使参院・竹間】

竹間・院伝・同・東使・同・所司代・寝殿・北廂・御陪膳／堀川・御手長／日野西・役送／松尾・申次／裏辻・出迎下北面／岡本・姉小路・右伝衆書付。

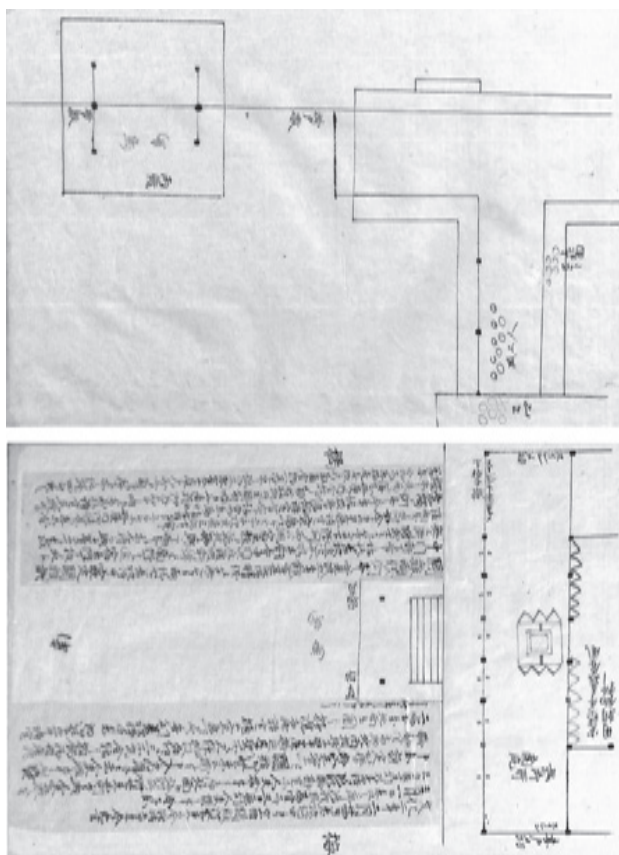
(付箋①) 自関東進覽物已下之事、依便宜歟。藏人商量之様ニ相成有之。文化四二三、所司代引渡・老中安藤対馬守・所司代阿部播磨守参院之旨、当番羽倉信賢・吉田良久朝臣有諷諭・元当番上北面下北面より附之。日六等受取伝衆衆・尋十五帖敷へ為持西椽座敷ニ持込。大刀拵昂進覽武士献上大刀拵却撤合操置事之由、仍已来其覚悟之事へ翌四日、橋本堯直・松室重義当番也。依之重義取計、堯直も同様ニ点検也。台拵(付箋②) 評定衆伝奏立拔出書様如此。／杉原四ノ折、但御陪膳已下役送迄也。」(25ウ)

小御所・スイン・メ切・大臣・公卿・官方・公卿・寛政入
 御燭如图出・水引括・メ切・スイン・ケンレン・東立付・
 雲客・役送・残之硯・紙」(27オ)



【図版16・寛政三年二月廿六日御当座始】

寛政七年立此屏風、用朝餉料・妻戸メ切・スイレシ、弘御所
 南庇・スイレシメ切・スイレシ下水メシノ下格子撤・宿直・
 宿直・鳥(朱筆)・鳥(朱筆)・梅・橘・南「(29才)」
 公卿殿上人・上北面已下・掛戸撒・雨儀・鳥(朱筆)・鳥(朱
 筆)・掛戸撒「(29才)」



【図版17・閨鴨】

(付箋①) 文化二年二月廿四日、差次侍中ヨリ宗順へ關鷄御装束可令沙汰告来、令返書。

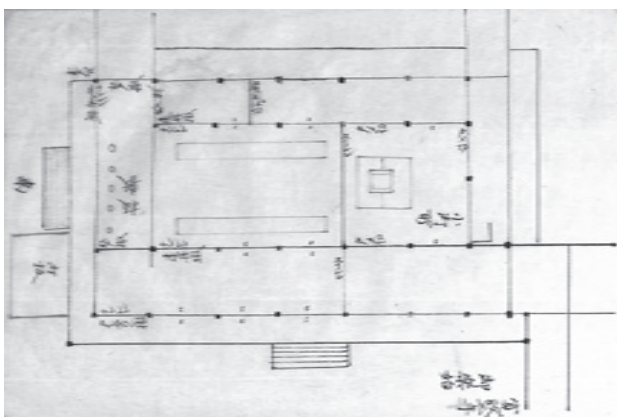
三月一日、参仕之序、修理職勘定等、三日辰刻入夫催之事令下知。

三日辰半刻比、参侍。修理職・勘定等、入夫揃之事申届。北面弘御所御装束如何可被廻、入夫相廻之旨申知、評定加勢、外山光実卿へ關鷄御装束取掛之旨申入。可為勝手被示。入夫廻之事届修理職・勘定。相廻北西撒格子、翠簾掛豆、台盤所見繕掛改、白紵^二三所宛令括之。朝餉錢形屏風二帖出置、北西立囲之。掃除相済、評定樋口宣康卿三届。午刻差次侍中参洞。御装束具評定申届置之旨申之。

(付箋②)

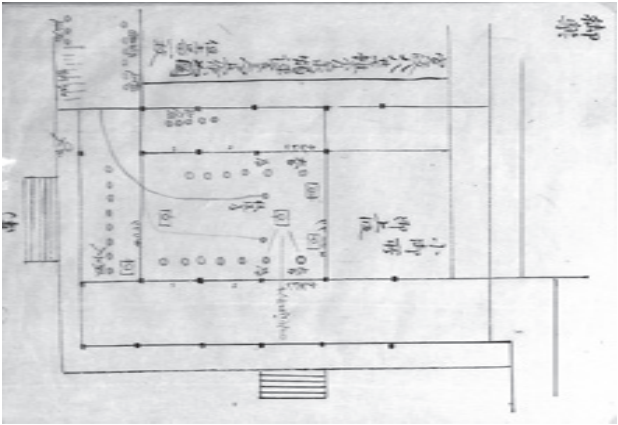
關鷄雨儀ノ例無之。寛政五年雖有其沙汰、晴儀^二而相済也。今日雨儀也。差次侍中窺定關鷄於中門軒下有之。始終差次進退如晴。牛飼童中門辺居、渡殿軒伝^二而南階下江進。宿直階下柱ノ北江警衛附武士已下、簀子下階間ノ西へ可廻、宿直柱ノ添北警衛候ハ、雨義^下相心得可廻于簀子下。尤以後雨儀ノ節如今日可覚悟。評定宣康卿^才被示。取次虫鹿三河守へ命。秉燭ノ例無之。今年依及昏、臨期評定有命。弘御所東廂へ南布障子ヨリ一間計北ノ中程へ母屋内御帳台ノ東等へ金燭出之、北面へ渡。尤母屋ノ内金燭ノ南へ六枚折片立囲、外へ明不透様、御道筋斗明^二相成様評定点檢有差図。小御所東椽座敷杉ノ南角金燭一台出之。弘御所東簀子唐戸ノ外北ノ角ヨリ廊下所々行灯四斗出之。」(29才)

小御所・戸メ切・戸メ切・戸メ切・戸メ切・スイレシ・スイレシ・戸
 シヤウジ撤・ケンシシ・屏風仕切・建具撤・ケンシシ・ケン
 レシ・建具撤・杉戸撤・板敷・杉戸撤・杉戸撤・ケンシシ・
 建具撤・妻戸開・打板・南_二(31才)



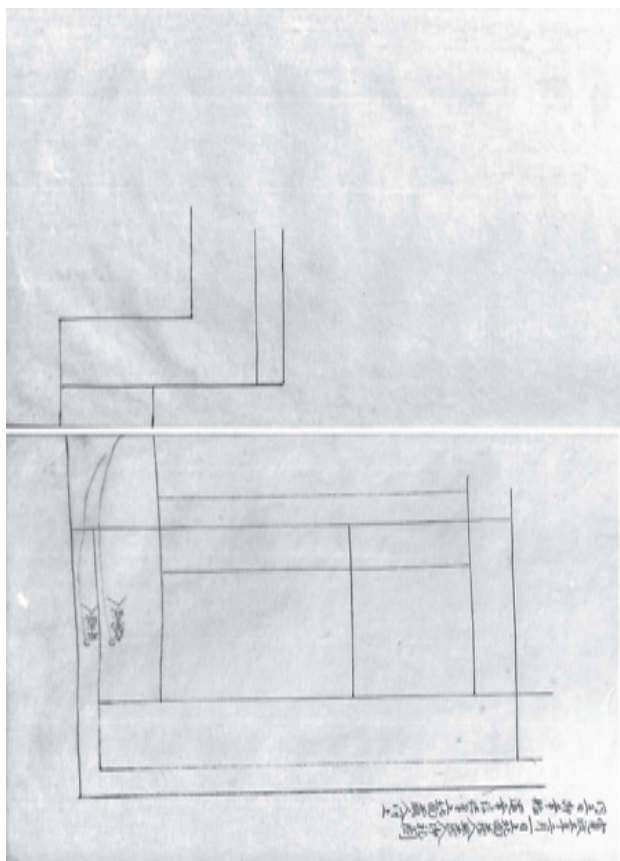
【図版18・寛政三年／御樂始】

小御所御上段・ケンレン・スイン・大臣・公卿・大臣公卿
之間（朱筆）・役送道・大臣・公卿・ケンレン・役人衆・殿
上人・ケンレン・樂人・樂器・役送・役送・当番・南・寛政
八八廿七、雖不及秉燭評定三卿点使（ツキ）如图／但土器一枚。」
(33オ)



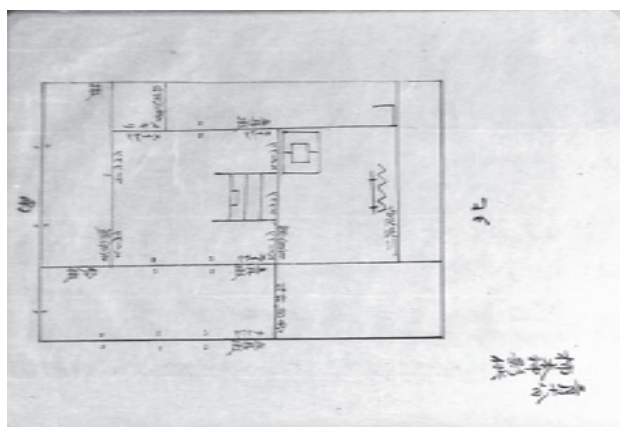
【図版19・御衆】

非藏人・上北面藏人〔35才〕



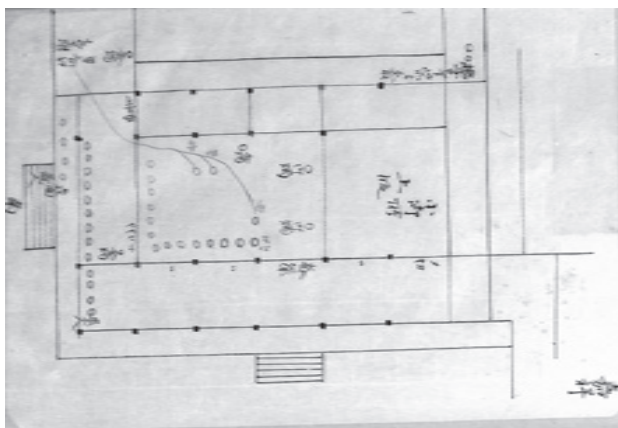
【図版20・寛政三年二月一日、上北面藏人・非藏人御礼図／同五日、御幸始 還幸後供奉上北面藏人同上】

北・白張泥引・立具撤・屏風仕切・立具撤・クンレン・立具
 撤・杉戸撤・スイレシ・クンレン・スイレシ・スイレシ・ス
 イレン・スイレシ・クンレン・立具撤・メキリ・
 屏風仕切・立具撤・撤・南一(38才)



【図版21・三月十八日／柿本神影供】

↓ (貼紙アリ)

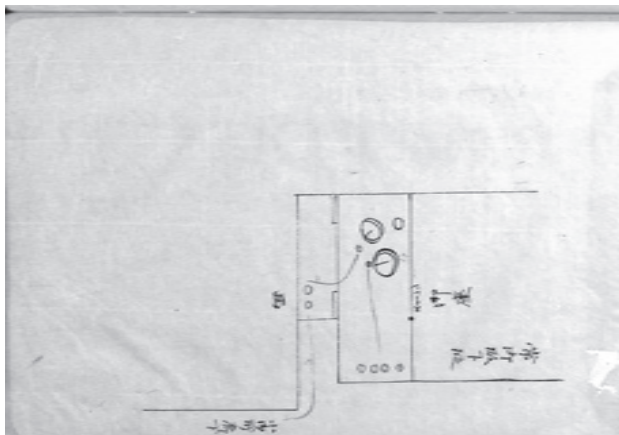


【図版22・嘉祥】

ノ切・小御所上段・挑子以下此處三而受取・卷簾・御燭・御燭・金燭・公卿(朱)・酌(朱)・加肴(朱)・殿上人・ケンレン・金燭・上北面藏人・西立付・金燭・挑子以下此邊三置・南(貼紙)文化三年、今年秉燭里巡流相済、御前金燭二言雲客被出。公卿前中段四間上番南此東方等藏人出之。十五帖敷二台出之。秉燭事、明和七八年之比有之敷。

獻教之事、最初五獻也。〈巡流二獻／小掛三獻〉俊名上北面之後、獻教三獻三相成。享和三年六月十五日、今日御盃獻教何比敷三獻也。明和度之通、五獻被改之旨可覚悟、冷泉為訓卿被申渡。

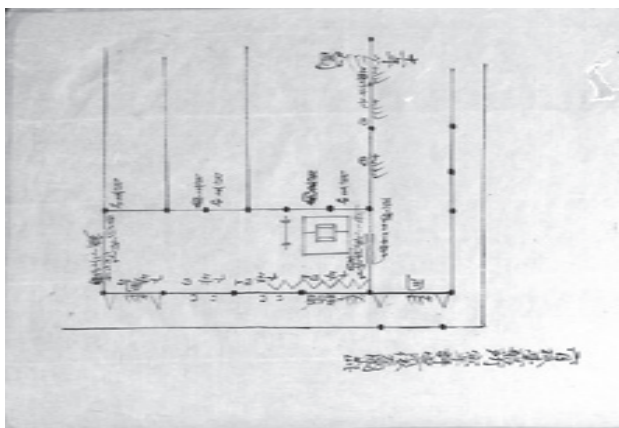
常御殿下段・御座・スイレシ・小御所廊下・西」(43ウ)



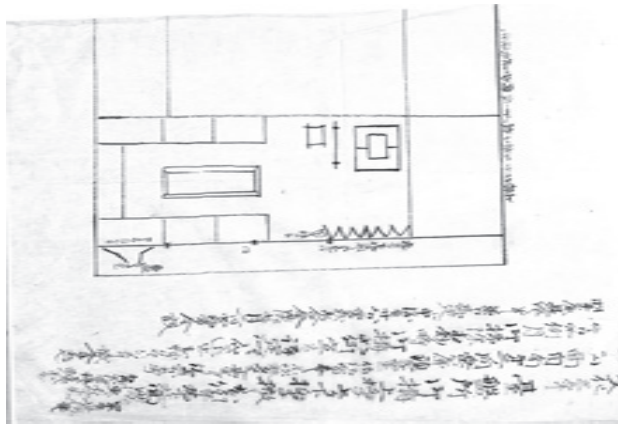
【図版24・同、常御殿下段】

(43オ)

ン・ケンレン・開・ケンレン下格子撤・同・同・同・ケンレン・開・下竹同上・下竹同上・下竹同・南方ニ而明置・酉年御寒之節・下竹・ケンレン・格子上下撤・下竹同南・北立付・南立付・北立付・南立付・ケンレン・ケンレン・上格子斗上ル・同・同・十一年ケンレン如图」



【図版23・六月祓、台盤所 寅年評定衆依差図如此】



【図版25・同、文化三年六月祓台盤所御構 (貼紙)】

上格子アゲ下格子撤ノ事、依例為下北面沙汰・上格子上ゲ下格子撤之・スイレシ同・此所斗鎮子置・同・悉不開・ヒラキカゲン・セミクロ、ハヅシ置。

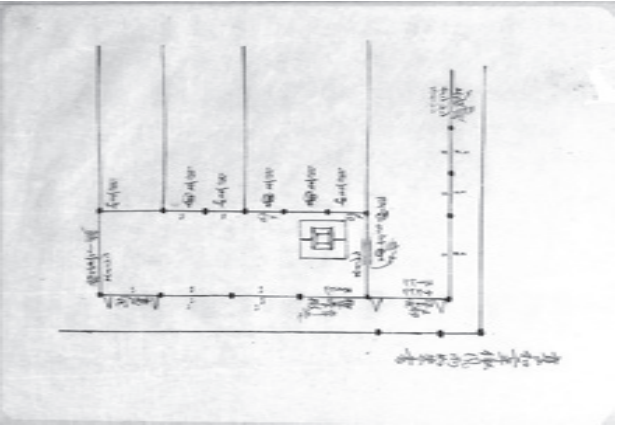
(貼紙)文化三年、台盤所御構上格子上ゲ下格子撤之。尤例年為下北面沙汰へ累年覚悟年々／更ニ不及下知／相済如尋常設之旨、届之。藏人承置へ。

一、西面自南第二ノ間垂簾鎮子置依括留無之、不吹放タメ也。勘定ヨリ鎮子一本取寄。

一、今日如例月御掃除相勤ノ時、御構如例宣旨、評定卿へ届退出。尤蟬クロ、ハヅス斗、藏人手取也。

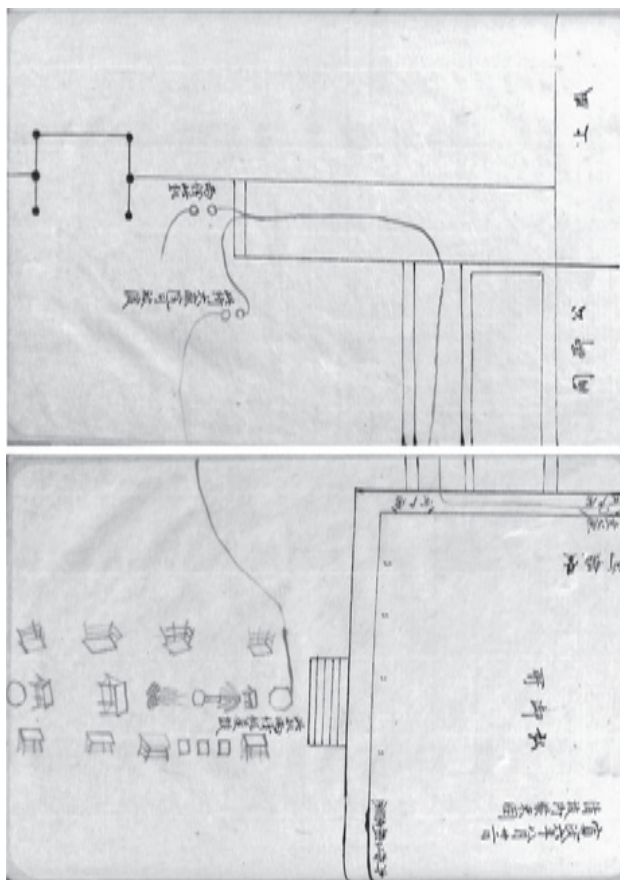
一、翠簾見繕之事、兼日勘定江申渡置。廿八日重義参合令沙汰、七月二日如尋常令設。

メ切 (朱筆)・ツアト開・ケンレン・スイレン (朱筆)・上斗
上ル (朱筆)・格子上下撤・スイレン・妻戸開・メ切 (朱筆)・
格子撤・ケンレン・スイレン (朱筆)・スイレン・メ切 (朱筆)・
南方三明置・メ切 (朱筆)・北立付・南立付・
南立付・北立付・南立付・北立付」(44才)



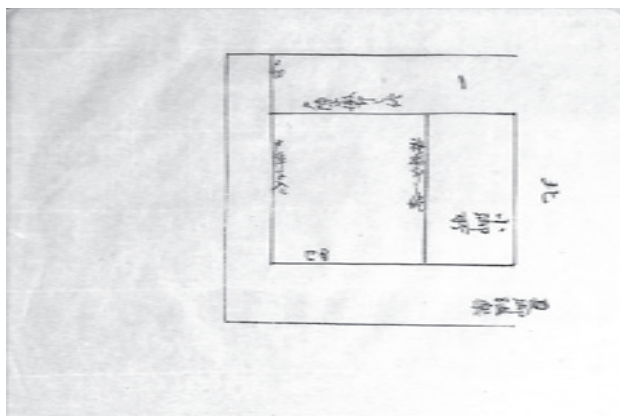
【図版26・享和二年依風雨如朱書 (朱筆)】

弘御所・白盤所・御格子撤垂簾・垂簾・唐戸開・唐戸開・此
 處雨儀仮屋設「(46才)
 公卿間・殿上・此所大麻院司被渡・雨儀此處」(46才)



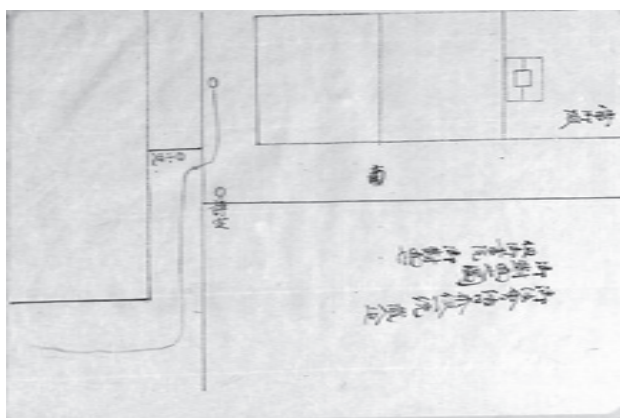
【図版27・寛政六年八月廿一日／清祓御装束図】

北・小御所・礼撤却之俟・同西・戸障子入ル・戸障子撤却之俟・ノ切」(49才)



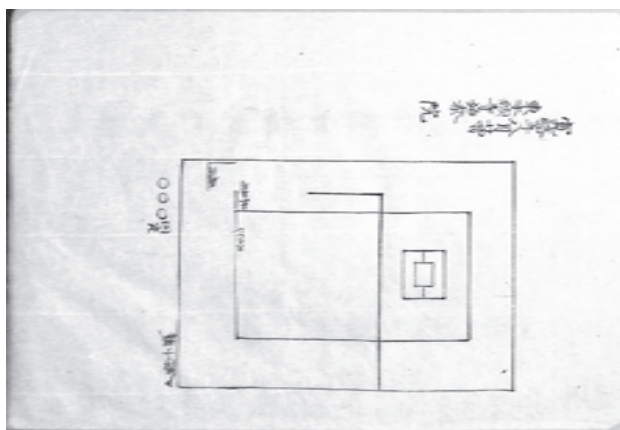
【図版29・夏御法案】

但御書院 御対面也・常御殿・南・評定・小見」(48才)



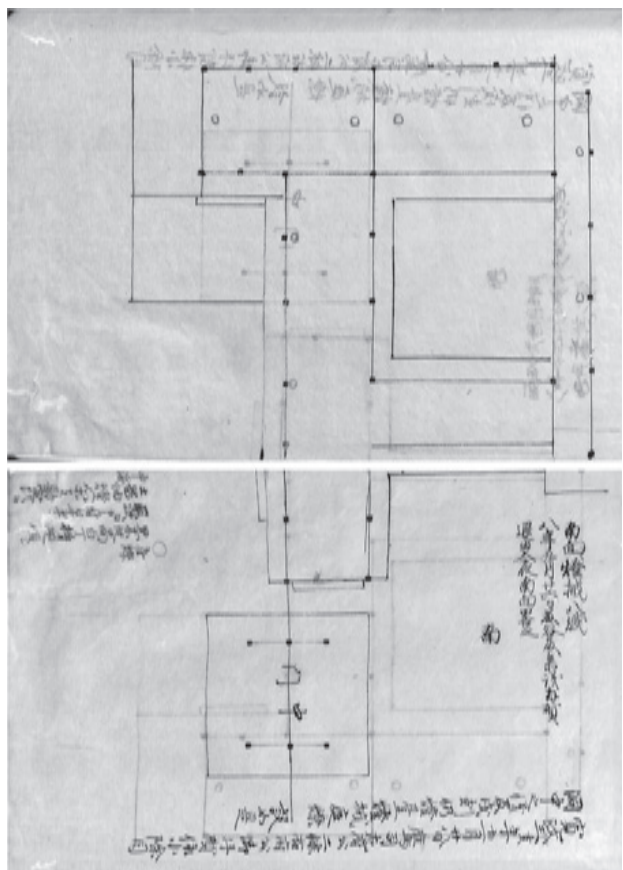
【図版28・御法会結日参役一統蔵入迄／御対面之図】

戸障子撤・円座・スイン・東立付・屏風〔49才〕



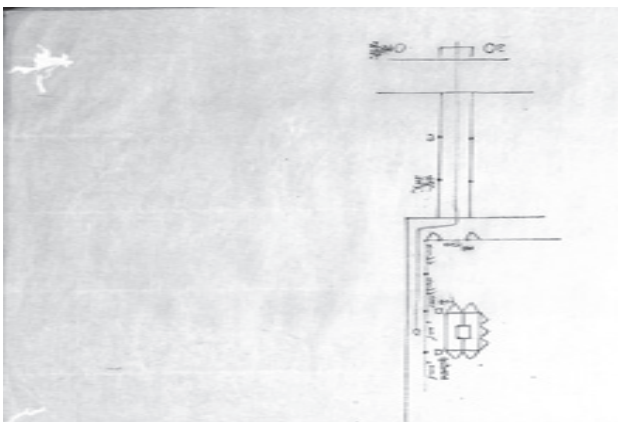
【図版30・寛政四年八月廿四日／東本願寺始参院】

南・中門・南面灯械八貳／八年九月廿六日、藤谷殿参議拝賀
 ／退出入夜。南面略之・庭燎／黒木從口向白丁持廻、但シ／
 取次江申付候事。／土器・油・灯心等者、勘定頭江／申渡。」
 (52才)



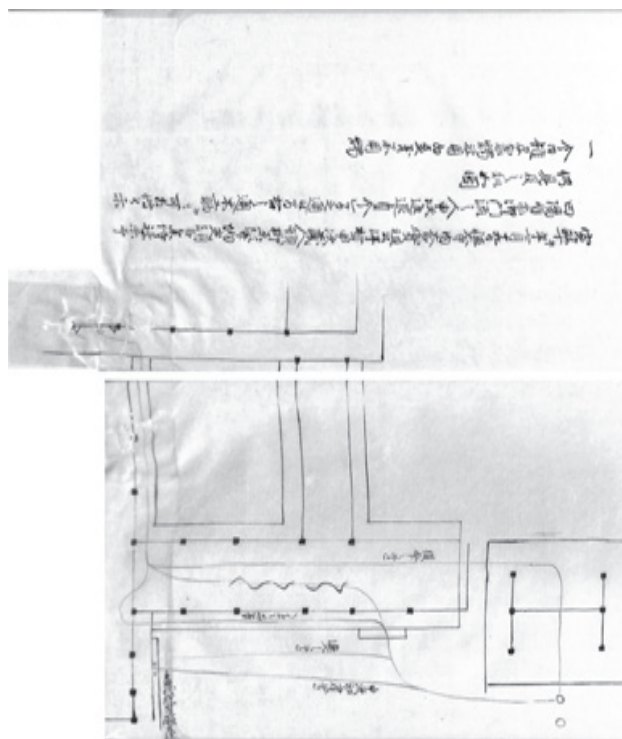
【図版31・寛政三亥年十一月廿八日、鷹司左府公・二条右府公御拝賀、依小除日／洞中之儀及戌刻、仍灯台・灯械・庭燎設如是】

灯台・牛フン・スライレン・スライレン・庭燎・同」(53才)
 スライレン二重・灯械・同・庭燎・同」(53才)



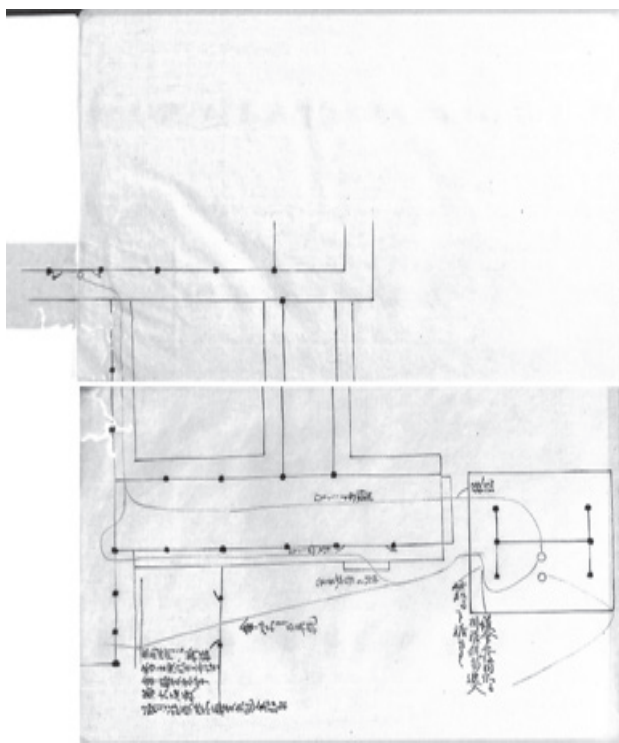
【図32・應司政熙公関白宣下】

申次初度道・退入之道・奏聞之道・復命之道・主典代執答・
片官授劄」(54才)



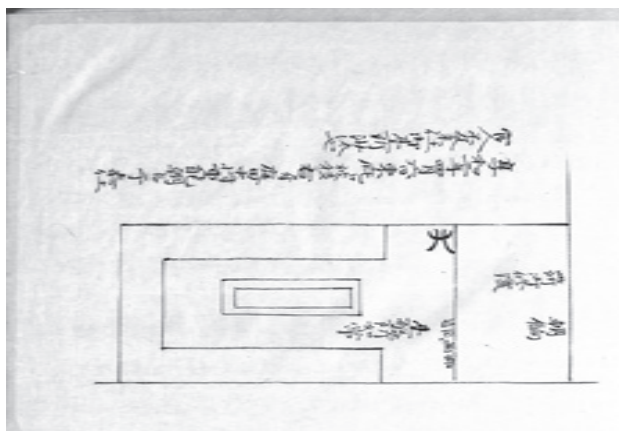
【図版33・徳大寺内大臣実祖公拝賀】

(右)復命之後同所^二而^一掛裾執笏退入・此處^二而下裾召具・徒跣・此處^二而^一笏授召具・奏問之道・復命之道・拿此處^三召具執・依雨此所^二而^一掛裾・省主典代井上丹後守・倉亭官束帶、笏大石授、諸司祇候此所、序官衣冠、余狩衣」(55才)



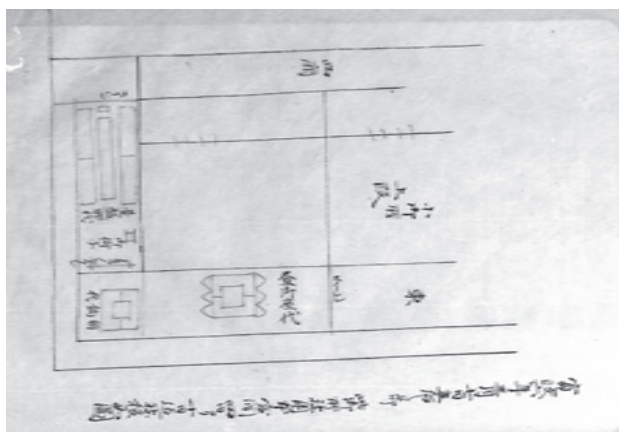
【図版34・同拜賀、雨之儀】

朝餉・此所御修覆・屏風仕切・台盤所如常」(57才)



【図版36・享和二年四月六日東庇江被移、右ニ付庭田中将重能朝臣・予参仕／官人不及参仕、御台所沙汰也】

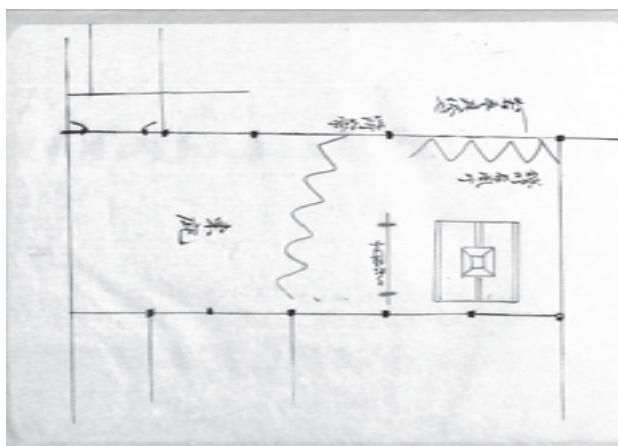
東・スイレシ・昼御座代・朝餉代・小御所／上段・西廂・タカツノシヤウシ・御椅子・台盤所代・スイレシ」(56才)



【図版35・寛政六年三月七日立后之節、此御所被用本宮間、四日ヨリ十日迄被移如图】

(57ツ)

錢形屏風片・如右疊其體也・此所如常・高松障子・東庇」



【図版37・同、東庇】